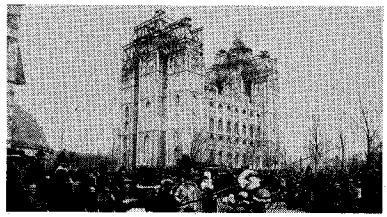
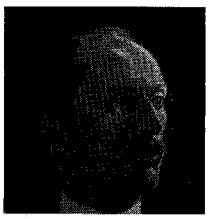
聖徒の道　1978年4月20日発行（毎月1回20日発行）　第22巻第4号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道

4　1978

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会
スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会
エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・スティブレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

顧　問
マリオン・D・ハンクス
ロバート・D・ヘイルズ
ディーン・L・ラーセン
リチャード・G・スコット

教会誌編集主幹
ディーン・L・ラーセン

国際機関誌
ラリー・ヒラー（編集主幹）
キャロル・ラーセン（編集副主幹）
ロジャー・ギリング（デザイナー）

「聖徒の道」
八木沼　修一（翻訳部長）

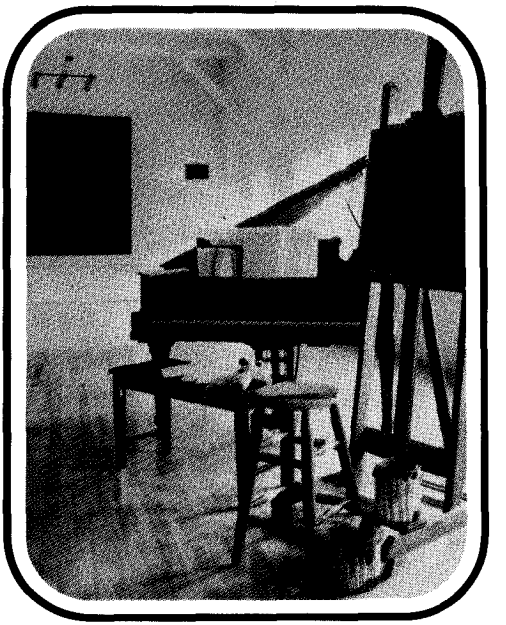
もくじ

福音と芸術……スペンサー・W・キンボール…… 1
愛の手……ヘレン・J・セリー…… 6
質疑応答……H・ディーン・ギャレット…… 9
みんなの参加――家庭の夕べを成功させる鍵……グレン・W・ハーパー……11
すべてを感謝して受ける……エズラ・タフト・ベンソン……14
ローカル・ニュース……17
「ほかの9人はどこにいるのか」(ルカ17：11―19)……19
ぼうきれの「ぼうくん」……ベティー・ルー・メル……20
かがく……ジェームズ・E・ハイヤー……22
よいとなり人，ソクタエ……アノベル・アーマー……24
神殿のおがくず……ガートルード・M・リチャーズ…28
証を得る門を開く……セオ・E・マキーン……34
福音により人生の問題を解決する……ニール・A・マックスウェル…37
捕われの宣教師……メルビン・レビト……41
必ずしも速い者が競争に勝つのではなく，強い者が戦いに勝つのでもない…ウィリアム・G・ダイヤー……44

聖徒の道4月号
発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5―8―30
印刷所　株式会社　精興社
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4―9―19
定　価　年間予約1,700円　1部150円
海外予約1,700円
INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号　東京0―41512
口座名　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

表紙の説明：末日聖徒の美術家　ジョン・ヘイフェン画，田園風景。



福音と芸術

大管長
スペンサー・W・キンボール

今や教会員は，演劇，音楽，文学，彫刻，絵画，科学，その他，美を追求するあらゆる分野ではなばなしい活躍を見せている。教会員がそれぞれの分野で卓越した地位を固め，やがて世の人々の注目を浴びる日が来ることを，私は長い間夢見てきた。

ジョン・テイラー大管長もこのことを予言し，次のような言葉で強調している。

「私の言葉に注意し，それを書き留めて，私の語ったことが実現するかどうか見ていていただきたい。

あなた方は，宗教に関して今日の私たちがそうであるように，シオンがあらゆる学問の分野で，それもあらゆる面において世をはるかにしのぐ日が来るのを見るであろう。

神は，シオンが全世界の人々の称賛と誉れを勝ち得，その声望が王たちの耳に達して彼らがシオンの栄光に注目するようになることを望んでおられる。」（説教，1857年9月20日：*The Messenger*「メッセンジャー」1953年7

月号参照）

私たちの教会には，ワグナー（ドイツの作曲家，1813—83）に近づいている人，あるいは近い将来その域に到達する人が大勢いる。芸術を愛し，並はずれた才能を持った，創作意欲に燃える若者たちがそれである。私たちは，このドイツの大作曲家ワグナーをしのぐ作曲家を世に送り出したいものである。もっともその奇行ではなく，霊的な面においてであるが。

ヴェルディ（1813—1900）の歌劇「アイーダ」や「トロヴァトーレ」，その他の傑作を聴いて魅了されない人はいないと思う。ではもうヴェルディのような，あるいはヴェルディをしのぐような作曲家は出ないのだろうか。バッハ(1685—1750)のような作曲家を送り出すことはできないものだろうか。一部の音楽家はバッハの音楽を評して，宗教がその創始者に負う所が多いように，とりわけオルガン・コーラル音楽はバッハに負う所が多いと述べている。私たちが自らの持つ可能性を完全に理解し，理想を描き，未来に対するビジョンをしっかりと心に抱き続けるならば，私たちの時代に，私たちの民の中に，そのような大作曲家が誕生するであろう。

ブリガム・ヤングは語っている。「数学，音楽，その他あらゆる科学，芸術の世界におけるすべての偉業，高度な技術，人類への貢献は，ことごとく聖徒たちの中から生まれて然るべきものである。」

世界各地の教会を訪れて，聖徒たちの甘美な歌声に私は何度心を奪われたか知れない。これら今日の，また明日の忠実な聖徒たちは，優れた才能を秘めている。従って，最高の訓練を受けるならば，大歌手と言われている人々に勝るとも劣らない者になれると，私は信じている。

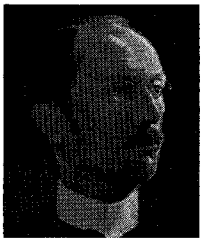
天性の能力を具え，高度な訓練を施された教会員は，他の人々をしのぐはずである。というのも，光と真理をもたらす聖きみたまを特別に受けているからである。私たちの中には，才能に恵まれなおかつ神に従順な人々が大勢いる。つまり，私たちは才能を正しく効果的に発揮し得る人々を大勢抱えているのである。

ある偉大な芸術家は，自分の作品の中でどれが最高かと問われて，即座に「次の作品です」と答えたという。

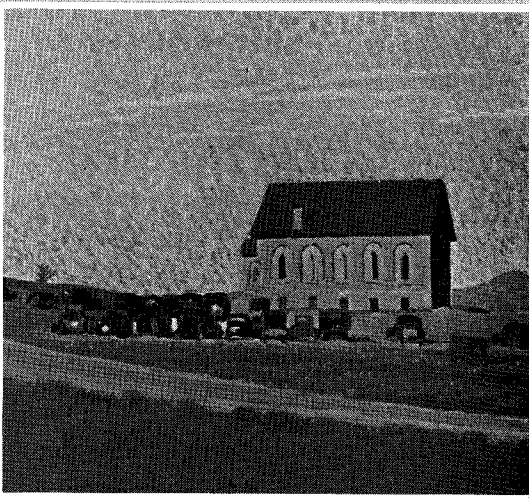
完全なもの，つまり最高にして最上のものを目ざして努力するならば，言い換えれば，並であることに決して満足しなければ，私たちは他に秀でることができるのである。それなのに，作曲と演奏の両分野において，ヘンデルの「救世主」をしのぐオラトリオをだれも書けないのはなぜだろうか。現在まで，まだ最高の作品は書かれていないし，発表されてもいない。その最高傑作の主題には，ニーファイ人へのキリストの訪れを取り上げることができるであろう。また，私たちの明日の芸術家たちは，キリストが権能と大いなる栄光をもって再びアメリカ大陸を訪れ，この神権時代に地上に神の王国を設立されたことを，詩に歌い，それに曲をつけることができる。ヘンデルも，その他過去，現在，未来のどの作曲家も，この大いなる出来事を決して作品にできなかったし，また今後も余すところなく表現することはできないであろう。歴史と教義と啓示を学び，豊かな音楽的才能と経験に加えて十分な訓練を受けた，霊感あふれる末日聖徒でない限り，御父と御子の訪れや，教義と神権とその鍵の回復がもたらした栄光

◀「弁護士」
リー・クリーン・
リチャーズ画（1904）

「ジョージ・アルバート・
スミス」
ション・ヘイフェン画（1904）
▼



「葬儀」 レコンテ・スチュワート画（1948）
▼



「干し草作り」 ロールス・プラット画（1894）

を，言葉や音楽でドラマチックに表現し得ないのではないだろうか。

アイルランド生まれの劇作家・批評家ジョージ・バーナード・ショー（1856—1950）は，人生に対する態度を要約して次のように述べている。「人は物事を見て，『なぜできたのだろう』と考える。しかし，私はだれも成し遂げていないことを夢見て，『私にできないことがあろうか』と思う。」私たちに必要なのは，だれも成し遂げていないことを夢見て，『私にできないことがあろうか』と問うことである。

ニコロ・パガニーニ（1782—1840）はイタリアのバイオリニストである。なぜ私たちはパガニーニやその他彼のような偉大な芸術家を見いだし，養成して，世に送り出すことができないのだろうか。演奏力と表現力の深さ，気品の高さにおいて，なぜあの有名なハンガリーの作曲家・ピアニストのリスト（1811—1886）をしのぐピアニストを音楽界に送り出せないのだろうか。教会員の中で有能なピアノ奏者はすでに何人か誕生している。しかし私は，生き長らえて，ポーランドの政治家であり，作曲家であり，ピアニストであったパデレフスキー（1860—1941）をしのぐピアニストをこの目で見，この耳でその演奏を聴くことができたらと，秘かに願っている。19世紀のポーランドのパデレフスキーを限りに，立派なピアニストがすべて絶えたわけではない。傑出した独創性，神経の細やかさ，ローマン主義的な表現をもった才能のすべてが，パデレフスキーというひとりの人間とその手に凝集されたわけではない。比類ないはなばなしい生涯を送ったこの著名なピアニストに続く芸術家が生まれるはずである。

ミケランジェロはもう出ないのだろうか。いや，そのようなことはない。彼の作品であるフローレンスのダビデ像やローマのモーゼ像は，私たちに追従を促すものである。彼のような才能の持ち主は，あの時代に出尽くしたのだろうか。ミケランジェロのような才能を持った，それでいて不道徳や肉欲や偏狭とは全く縁のない心を持った人間を見いだせないものだろうか。偉大な芸術家の多くは，正道をそれ，道徳的に堕落していたと言われている。それにもかかわらず，彼らは偉大な名高い芸術家になった。それがもしも道徳的に清く，啓示を受ける資格があって，同等の才能を持った人であったならどうであろうか。

ここで登場するのが，シェイクスピア（1564—1616）である。シェイクスピアほどその作品を引用される人はいない。この英国の詩人・劇作家は，驚異的な数の作品を残している。ハムレットや，オセロや，リア王や，マクベスは，彼のおびただしい量の作品からすると，前書きのようなものである。かつて彼のように非凡な才能に恵まれた者がいただろうか。世界はシェイクスピアをただのひとりしか生み出せないのだろうか。

私たちの世界には真の政治家が必要である。ジョージ・バーナード・ショーに倣って，『私にできないことがあろうか』と問うてみよう。私たちには人材も設備も備わっている。また，訓練も立派に行なえる状態にある。それに霊的な環境も整っている。私たちは，扇動政治家ではない本物の政治家を養成しなければならない。一椀のあつもののために生得権を売るような弱い人間ではなく，高潔な人間を養成しなければならない。私たちは，大切な若人に，政治手腕を身につけ，人々と世の状態を

知り，時局と問題を理解するよう指導を与えなければならない。将来就く仕事の技術を十分身につけ，正直で誠実な生活を送り，霊的な考え方を徹底的に教え込まれた者なら，決して妥協はしないであろう。

教会には，歌となり，物語となり，あるいは絵となり，彫刻となる題材が豊富にある。例えば，回復，神の王国が再び設立されたこと，苦闘と挫折，背教と内部改革，当初十年間の反改革，西部への移動，反対運動，過渡期，迫害の時代，「喜びあふれぬ　生ける神見て」（「末日聖徒讃美歌」138番）と歌われている奇跡の人ジョセフ・スミス，偉大な開拓者・建設者ブリガム・ヤング。私は長年，これらを十分に表現して，歌に，物語に，絵画に，彫刻に残す人が現われるのを待っている。

私たちは，教会のごく初期から伝えられてきた芸術的遺産を誇りとするものである。しかし，モルモニズムはまだ書物にも，絵画にも，彫刻にも，講演にも，完全には表現されていない。それをするのは，これから先，霊感を受けた才能ある人々の務めである。このような価値ある主題に生命と感情と正しい理解を与えることができるのは，忠実で霊的で活発な教会員しかいない。偉大な芸術家の手になり，一流の批評家に認められたこれらの作品は，すべての映画館で長期興行となり，地球上のあらゆる国語の民の目に触れることだろう。

私たちの作家と映画製作者は，ごく近い将来，天からの霊感を受けて永遠の傑作を作り出すことだろう。大義への献身という力に支えられた私たちの才能は，ストーリーに生命と感動，愛と哀感，ドラマ，苦痛，恐れ，勇気を与える。そして，作家と映画製作者は，エジプトからエリコに至る以上にはるかに遠く人々を導いて行った，近代のモーセと言われる偉大な指導者を作品の主人公とする。また，ホレブの岩から流れ出た水，荒野で与えられたマナ，巨大なぶどう，必要な時に雨が降ったこと，勝ち目のない戦いに勝ったこと，これらは昔の奇跡であるが，近代のモーセもこれと同じ位に偉大な奇跡を目の当たりにしたのであった。

ニコデモにジョセフ・スミスの霊を注ぐとしよう。一体どうなるだろうか。ダ・ビンチ，ミケランジェロ，あるいはシェイクスピアに，神の救いの計画と個人の啓示に関して完全な知識を与え，かつ彼らを清めよう。そして，彼の刻む像を，描く壁画を，書き下ろす傑作を見てみよう。また，天与の才能を具えた努力家で，正確な描写を熱烈に望んでいたヘンデルに，真実の物語と啓示に対する理解を得させよう。どのような名匠，大家が誕生するであろうか。

私たちは，自分自身と自分の生活と神にどのような思いを抱いているかが，そのまま各自の美点や特質となって反映されることを認識する必要がある。この基本的な事柄にあまり心を留めないでいると，行ないにそれが表われて，私たちの働きは見せかけの卑しいものになってしまうのである。

技術のいかんにかかわらず，真の技能は，真の心遣いを反映する。また真の心遣いは，自分や仲間および人生に対する私たちの心構えを反映するのである。

☆　　☆

愛の手

ヘレン・J・セリー

午前2時30分，広いサンフランシスコ空港はひっそりと静まり返っていました。私は取り残されたような気持ちでした。ムームーを着て，すっかりしおれたレイを首にかけた女が，ぼんやりとした眼差しの疲れ切った3人の子供の手を引いている光景は，さぞかし哀れであったに違いありません。当時，一番上の子供がやっと5歳になったばかりでした。

私はサービスカウンターにいた人に，町までどの位ですかと尋ねました。すると，最終のバスが出るところだから，急げば間に合うかも知れないという返事でした。彼は大急ぎで私たちの荷物を運び，私たちを発車間際のバスに乗せてくれました。そして，彼に御礼を言うひまもなく，バスは発車しました。

終点の待合室は閉まっており，真暗でした。バスを降りた乗客たちは，足速に夜の闇の中へ消えて行きました。空になったバスはどこへともなく走り去って，私と3人の子供だけが取り残されました。4つのスーツケースと2つの小さなトランクを傍らに，私たちは，サンフランシスコの歩道に立ちつくすのでした。

その時，ひとりの男の人がバスの待合室から出てきて，ドアに錠をおろそうとしているのが目に入りました。そこで私は急いで彼の所に駆けて行き，タクシーを呼びたいので電話のある場所を教えてほしいと頼みました。また，近くにホテルがないかどうか尋ねました。すると幸いなことに，彼は通りを少し行った所に小ぎれいなホテルがあると教えてくれました。それから荷物を運ぶ手伝いもしてくれたのです。こうして午前4時，私は子供たちと共にベッドに入り，深い眠りにつきました。

それからの2日間，私たちはのんびりと過ごしました。近くのレストランで食事をし，ホテルから数百メートルと離れずに過ごしました。子供たちはこの世のわずらいなど全くないといった様子で，無邪気に駆け回っていました。それがかえって私には救いでした。

私たち家族は2年ほどハワイに住んでいました。夫は小さな教会の牧師をしていました。ところが，「傷つくまでに打てば悪い所は清く」なる（箴言20：30）と信じる夫は，子供たちに絶えずひどい体罰を与えたのです。私はそれを見るに耐えられませんでした。体罰がひどくなるにつれて，私は母親として子供たちを守ってやらなければならないと思うようになりました。そこで私はよく考え，祈った末に，夫と別れて，子供たちのために新たな幸せな生活を送るようにする以外にないという結論に達しました。私の両親は中西部に住んでいましたが，そこに身を寄せることはできません。経済的な問題もありますが，父親の病状が悪化していたので，小さな子供たちをそばに寄せることができなかったからです。近くに身寄りもありませんでした。生涯であの時ほど孤独を感じたことはありません。けれども，子供たちのために，私は自分の選んだ道を歩まなければなりませんでした。

ホテルに宿泊してから3日目に，私は何らかの決断を下さなければならないと思いました。落着き先も，仕事を捜す手段も，働いている間の子供たちの世話も，全く当てのない状態でした。新聞広告から仕事先を捜そうとしましたが，目ぼしいものはひとつもありません。それに，子供たちを置いて仕事に出ることは不安で仕方がありませんでした。けれどもこれ以上ホテルにいたら，財布の底をついて，状態がもっと悪くなることは明らかで

した。

そこで私は，以前に交流のあった教会の3人の牧師に電話をかけ，金銭的な援助ではなく，口添えをお願いしたいと頼みました。すると3人から異口同音に，「あなたは熱心な信徒ですか」と尋ねられました。そこで私は，とてもつらい目にあって心が乱れているので，熱心な信徒であるとはっきり申し上げられません，と正直に答えました。すると3人とも，困っている人が非常に多いので私を助ける余裕はないとおっしゃいました。私の苦悩は深まるばかりでした。どこに助けを求めたらよいものか，私は全く途方に暮れてしまいました。

私がハワイを発つ時に，幾人かの友人が見送りに来てくれました。その中にひとりの末日聖徒がいました。当時彼は教会に行っていない様子でしたが，別れ際に私にこう言いました。「困ったことが起きて助けが必要になったら，私の教会に電話をかけてごらんなさい。きっと助けてくれますよ。」

素晴らしいタバナクル合唱団のこと以外，私は末日聖徒について何も知りませんでした。私は助けを請うという考え方は好きではありませんでした。少なくとも，一度も行ったことのない見知らぬ教会の世話になることなど，心苦しいばかりです。けれども私はとても困っていました。それに，ほかに頼る当てが全くなかったのです。電話帳で末日聖徒イエス・キリスト教会を探すと，たくさんの連絡先が載っていました。そこで私は伝道本部という所に電話をかけることにしました。助けていただくにはここが一番よいと思ったからです。電話口に出た青年に，私は先の3人の牧師に申し上げたとほとんど同じことをお話しました。お金はいらないが，是非相談にのってほしいとお願いしたのです。すると彼は，自分はこちらに来たばかりで何もわからないので，自分では何の助けもできないが，名前と電話番号さえ教えてくれれば，ほかのだれかに折り返し電話をさせますという答えでした。私は半信半疑で受話器を置きました。電話などかかってこないのでは，という心配が私の心をよぎりました。

ところが驚いたことに，10分もしないうちに，私の話を聞いたという女性から電話がかかってきたのです。何とか力になりたいと言うことでした。彼女は私に，荷物をまとめ，タクシーに乗って；30分後にバークレーにあるバスターミナルで会えるようにしてほしいとおっしゃいました。それから御自分の車と着てくる服の特徴を説明した後，「ところで，あなたは教会員でいらっしゃいますか」と尋ねました。

「それ，またきた」と，私は心の中で思いましたが，「いいえ，ちがいます」と率直に答えました。

「いいえ，別に何でもないんです。ただお聞きしてみただけです。では30分後にお会いしましょうね。」

私は急いで荷物をまとめ，子供たちに身仕度をさせ，ホテルの支払いを済ませてから，バークレーに向かいました。私は見も知らぬ私たちに喜んで手を貸して下さるその女性に驚くと共に，少し不安な気持ちもありました。けれどもその時の私は，わらをもつかむ思いでその女性の好意に甘えたのでした。

彼女はまず私たちに昼食をごちそうして下さいました。その時に私は，彼女が当時ステーキ部長をしておられたO・レスリー・ストーン（現七十人第一定員会会員）という方の夫人であることを知りました。彼女は私たちを一軒の貸家に案内し，子供たちの世話をしてくれる人を紹介すると約束して下さいました。私はいかなる教会に対してもひどい悪感情を抱いていて，この気持ちはどうしても変わらないことを彼女に強く訴えました。私はどうしてもこの気持ちを脱することができなかったのです。けれども彼女はそのような私の態度を少しも気にとめることなく，とてもよくして下さいました。

私は宗教に対してひどく反抗的でした。けれども彼女はそのことを気にする様子もなく，私を改宗させようとしたり，責めたりもしませんでした。逆に，私の手伝いをさせてもらっているという態度で接してくれたのです。

「互に愛し合うならば，それによって，あなたがたがわたしの弟子であることを，すべての者が認めるであろう。」（ヨハネ13：35）私の心には聖書のこの一節がこだまするのでした。

その後数日間，ストーン姉妹は毎日来て下さいました。そして約束通り，子供の世話をしてくれるひとりの教会員の女性をさがし，また小ぎれいなアパートも見つけて下さいました。それから仕事について相談するようにと，ひとりの男の人を紹介して下さいました。彼女は教会のことには一切触れませんでした。これは私にとって驚きでした。相変わらず私の心には，「互に愛し合うならば」という聖句が響いていました。

ある日私は，アパートの部屋で，ジェームズ・E・タルメージ長老の「信仰箇条の研究」という小さな本を見つけました。ストーン姉妹がそっと置いて行ったのか，前に借りていた人が忘れて行ったのかわかりませんが，とにかく，私は夜，子供たちが寝ついた後でその本を読むことにしました。別に興味があったわけではなく，ほかにすることがなかったからでした。

こうして数週間が過ぎました。ストーン姉妹は土曜日になると必ず私たちに，日曜日に一緒に教会に行きましょうと誘って下さいました。しかし私が丁重に断わると，無理強いはされませんでした。けれども毎週誘って下さいました。その一方で，私は「信仰箇条の研究」を夢中で読みました。私はそれまで熱心に聖書を勉強してきましたが，これまで聞いたことのない事柄がその本に書かれていたからです。過去に学んできた教えと真っ向から対立する教えや，理解に苦しむ点がたくさん出てきました。そこで私はそのような事柄が出てくる度にノートに書き留めました。

ある土曜日のこと，ストーン姉妹がいつものように来られました。私は相変わらず，教会に行くのを断わりましたが，信仰箇条についていくつか疑問の点があるので，牧師を紹介してほしいとお願いしました。数日して，ステーキ部宣教師と名乗るマービン・ターナー夫婦が訪れてきました。私はとても失礼な態度で，7ページに及ぶ疑問の数々を突きつけました。そして，これらの質問に答えて下さるならお聞きしましょう，と言ったのです。これに対して，ターナー兄弟は，自分はすべての質問に答えることはできないが，教会のことを学べばわかりやすく論理的な答えが得られるでしょうと教えて下さいました。ターナー夫妻が忍耐強く，穏やかに教えて下さった結果，私はそれらの事柄が真実かどうか，祈ってみようという気持ちになりました。そして教会へ行く約束もしました。それから間もなくして，私はバプテスマを受けました。その後，私は南カリフォルニアに引っ越しましたので，この方々との音信は途絶えてしまいました。私は再婚し，子供たちが生まれました。

あれから長い年月が経ちました。私は今，聖餐会に出席して，息子のひとりが祝福し，もうひとりが聖餐のパスをする姿を見ています。子供たちはそれぞれ，信仰と証を強めています。私は今，様々な人々の伝道の業を通して教会に導かれた人々のことを考えています。また，私たちの行なった系図の仕事を通して，バプテスマとエンダウメントと結び固めを受けた霊界にいる親族のことも考えています。

そして何よりも，あの愛に満ちたストーン姉妹と，伝道と愛の精神に満ちたターナー家族のことが思い出されてなりません。数多い聖徒の中で，あの方々は今もなお，人々を愛し，気づかうことによって，主に仕えているに違いありません。また，かつて何かと反抗的であった取るに足らない私のことをあのように心に掛けて下さった方々に，どのように報いることができるかと考えないわけにはいきません。そしてその答えがはっきりと私に聞こえてきます。「あなたも行って同じようにしなさい。」（ルカ10：37）

☆　　☆

みんなの参加―

家庭の夕べを成功させる鍵

グレン・W・ハーバー

夕食が終わってから私たち夫婦が床に就くまで，わが家の家庭の夕べは家族にとってとても楽しい，週の最大の行事である。そのわけは，ただ単にテキストを使うだけでなく，月曜日の夕べを家族の活動の中心としているからである。

家庭の夕べの第一部は家族会議である。食卓を囲んで，父親である私が議長となって，みんなで家族のいろいろな事柄について話し合う。小さな子供たちにとっても家族会議は非常に有益である。家族にとって大切な事柄を発表したり，一週の間に子供たちが行なったよいことをほめたり，話し合ったりするのがこの時なのである。

家族会議では，何ヵ月も先の旅行から，土曜日の家の雑事やピクニックといった目先の計画まで，家族の様々な予定についても話し合う。

家庭の夕べの第2部はレッスンである。赤ん坊まで家族全員が集まって，（責任を果たせる年齢の）子供たち全員に責任を分担して歌や祈りやレッスンを行なう。

第3部は子供たちがベッドに入ってから始まる。就寝までの1時間余り，夫婦で読書をしたり，手紙を書いたり，話をしたり，系図を書いたり，家族の問題や子供にはむずかしい計画について話し合ったりする。つまり，第3部は大人の時間である。

このように家庭の夕べの時間を幾つかに分けることによって，子供たちは可能な範囲で家族の問題や決定に自分の意思を反映することができる。また，レッスンを教えたり，リフレッシュメントを用意したり，歌の指揮をしたりすることができる。さらに，大人同士の話し合いや活動をする時間もある。大人にも子供と同じようにそうする時間が必要だと私たち夫婦は考えている。また，子供たちが大きくなって，家庭の夕べの大人の部にも参加できる日を，私たちは心待ちにしている。私たちの家庭でも御多分に漏れず，レッスンは良いけれども長いので，その時に子供たちが騒ぎ出すという問題があった。しかし，一時としてじっとしていられないのは，活動力旺盛な証拠である。そこで私たちは割り当て輪表を作り，開会の歌，開会の祈り，レッスン，閉会の祈り，リフレッシュメント，ゲームまたは活動という6つの割り当てを決めた。子供たちが成長して責任が果たせるようになったら，みんなが大切な役割を持てるように，表にもっと責任を書き加えたいと思う。

私たちは居間のある場所を特別な「発表の場」としている。そして，レッスンや祈りや歌の指揮でそこにだれかが立つと，みんなはその人に注目する。子供たちはそこに立ちたがり，そこに立つことは特別な名誉なので立派に責任を果たそうと念を入れて準備をする。

家族をびっくりさせるために，レッスンもリフレッシュメントも，その他の準備もすべて秘密である。

子供は初等協会や子供日曜学校で習ったばかりの歌を開会の歌にすることがよくあるので，何回も歌ってみんなで覚えるようにする。そうすると，小さな子供でもひとりで喜んで歌うようになる。

レッスンの準備にはテキストを使う。それは，そこに出ている概念が非常にためになるからである。しかし，テキストを読むようなことはしない。そのかわり，レッスンが終わると，すぐに次のレッスンの準備が始まる。子供にレッスンをさせる訓練は2歳頃から始

めるが，これは子供によって異なる。初めは父親か母親がだいぶ手伝うが，4歳になるまでには大抵のレッスンはひとりでできるようになる。

もちろん2歳や4歳の子供は字が読めない。そこでまず親がレッスンを通して読み，どの概念をその子が理解しやすいかを考える。これまでの経験からわかったことは，子供たちの能力を過少評価してはならないということである。子供たちは私たちの想像以上に理解していることがよくあるものである。

次に，レッスンをする子供に物語を全部読んで聞かせる。もしほかの子供たちに手伝ってもらいたいことがあれば，その子は私たちと話し合い，良いとなれば割り当てをする。それから私たちは，レッスンの資料を集める手伝いをする。

私たちは子供にレッスンの概要を教えるのに簡単な絵言葉を使う。子供はそれを見ながらレッスンを進める。例えば，疑問符(？)は前に考えておいた質問をみんなにするという印，本を開いた絵は物語を話すという印である。この印は年長になるに従ってもっと複雑にできる。

当然，このために週の内のかなりの時間を使うことになる。しかし，まとまった長い時間ではなく，小刻みにちょっとした助言を与え，まとまった時間はせいぜい15分位なものである。それでも，このように準備することによって家庭の夕べに対する子供たちの期待は大きくなる。子供たちにとって月曜日の夜は特別な夜になっている。1週間がかりで一生懸命に準備してそこに臨むのである。

驚いたことに，子供は2，3回で物語の骨子くらいは記憶してしまう。物覚えの良さにはこちらがあわてたほどである。幾らか慣れも必要だが，記憶力をそのような方法で伸ばしてやるとあきれるくらい自信を持ち，いろいろな機会を自分で見つけて吸収しようとする。

レッスンを担当する子供がレッスンの概要だけを手に持って家族の前に立った時は，父親も母親も口出しをしない方がよい。絵言葉の意味を忘れた時は，それを思い出すように励ますだけである。親がすぐにヒントを出したり，手伝ったりすると，要らない時にまで手助けを当てにされるようになるからである。子供は自立することを覚えれば，物事をひとりで成し遂げる能力が自分にあることを自覚するようになる。

小さな子供たちがいるわが家の家庭の夕べの成功の秘訣はこれだと，私は思う。必要なことはできるだけ手伝うが，子供にできることはできるだけ自分でさせる。一番大切なことは結果ではなく，そこに至る過程であると思う。子供が日曜学校のような立派なレッスンができないとしても，それが問題になるだろうか。本当に大切なことは，子供に，レッスンを準備し，行なうという経験を得させることなのである。実際に行なってみれば，きっと驚くことだろう。レッスンも，歌も，リフレッシュメントも，祈りも，ゲームも，すぐに年上の子供たちと同じようにどれも立派にできるようになるからである。

わが家の家庭の夕べの持つ魅力は，子供たちが参加し，参加をしながら準備の一時一時を楽しむことである。

また，それと同時に，ただ子供たちだけの家庭の夕べに終わらないということも大切であると思う。家庭の夕べは夫婦にとっても良い家庭の夕べでなければならない。そういうわけで，わが家の3部式家庭の夕べは，月曜日の夜を家族全員が首を長くして待つ特別な夜としているのである。

すべてを感謝して受ける

十二使徒評議員会会長
エズラ・タフト・ベンソン

教義と聖約の一節に基づいて，お話したいと思う。

「およそすべてを感謝して受くる者には栄光を与えられん。而して，この世のものもまた彼に加えらるることすなわち百倍よりも多からん。」（教義と聖約78：19）

私はこの聖句が引用された話をいまだに聞いたことがないが，これは素晴らしい言葉である。また，教義と聖約の59章には実に意味の深い言葉がある。

「すべての事に就きて，主なる汝の神に感謝すべし。

汝誠に真にへりくだりたる心と悔いる精神とを以て，汝の神に義しき捧物となすべし。」（教義と聖約59：7－8）

続いて主は，安息日について次のように言っておられる。

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様，祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。」（教義と聖約59：9）

そして安息日についてのみ言葉をこうしめくくっておられる。

「而して汝ら感謝と愉快なる心と顔容（かおかたち）とを以てこれを為さば，……

われ誠に汝らに告ぐ，汝らこれを為さば地に満つるすべてのものは汝らに与えらるべし。すなわち野の獣，空の鳥，木によずるもの，地上を歩くものは汝らのものとなるべし。

然り，また汝らの食物，衣服，家屋，小屋，果樹園，野菜畑，葡萄園など何れにしても，それらのために地より生ずる諸々の草と善きもの，

然り，すべてこれら季節によりて地より生ずるものは，皆人の為人の用いんために造られ，眼を楽しませ，また等しく心を悦ばせんためなり。

然り，これらは肉体を健にし人に元気をつくるよう，食物，衣服，味，香りのために造らる。

而して，すべてこれらのものを人に与えたるは神の悦びとするところにして，この目的のためにこれらは造られたれば，人は適量にこれを用いて貪(むさぼ)らずまたは無理に取りて用うべからず。」(教義と聖約59：15—20)

さらにこういう警告がある。「およそ人何事にも神を怒らせずまたは何事にも神の怒り燃ゆることなし，ただすべての事の中に神の御手のあることを告白せず，その誡命に従わざる者に神の怒りあり。」(教義と聖約59：21)

予言者ジョセフ・スミスが，ある時，末日聖徒の犯す最大の罪のひとつは感謝を忘れる罪だと語ったという。大抵の人は感謝を忘れることをそれほど重大な罪とは考えていないと思う。私たちは祈る時，さらに祝福をと，ひたすら祝福を願いがちである。しかし，私たちは祈りの中で，これまでに受けた祝福に対してもっと感謝を述べる必要があると思う。もちろん私たちには主の祝福が毎日必要である。しかし，もし私たちが祈りについて罪を犯しているとすれば，それは毎日の祝福に対する感謝の不足であると思う。

ブリガム・ヤング大管長も，これが私たち末日聖徒の犯している大きな罪のひとつであると，予言者ジョセフと全く同じ警告を発している。私たちが他の人々より感謝の心に欠けているというのではない。私たちには感謝すべきことがそれだけたくさんあるということだと思う。

私たち末日聖徒は，たくさんの祝福を当然のこととして受け取っており，それが特別なことだとは考えていないようである。

第二次世界大戦の終戦時に，私はソルトレーク・シティーの自分の事務室にいたが，そこにニューヨークに住む大富豪から電話がかかってきた。30の年で3千万ドルの財を築いた人で，彼の子息がソルトレーク・シティー郊外の陸軍基地にいた。ほかの軍人たちと一緒に海外に派兵される間際に終戦になったのである。かん詰のいわしよろしく，基地には軍人がすし詰めになっていた。そのことでその青年が意気消沈していたため，父親が心配して電話をかけてきたのである。「息子に電話して，励ましていただけませんか。」私は，「はい，喜んで」と答えた。それから私は青年に電話をして，「ちょっと私のオフィスに来ませんか」と誘うと，「ぜひ伺います」という返事であった。彼は少し遅れ，私が丁度帰宅の用意を終えたところに来た。

「私の家で一緒に食事をどうですか。妻には知らせてありませんが，きっと喜びます」と言うと，「願ってもないことです」という返事であった。そこで私たちはそろってオフィスを出て，わが家で一緒に食事をした。祈りも一緒であった。食後はピアノを囲み，歌を歌って楽しんだ。それからしばらく会話を交わし，私が彼をバス停まで送って行った。それから数日して，その青年の父親から手紙がきた。それには青年が父親に宛てた手紙からこのように引用してあった。「お父さん，私はこの世界にあのような生活をしている人たちがいるということを，今まで知りませんでした。」私たちはそれをごく当然のことと考えている。しかし，息子に金で買えるものは何で

も不自由なく買い与えることのできるこの大富豪は，家庭での祈りや敬虔という簡単なことを見過ごしていたのである。

私たちはもっと感謝の気持ちを持たなければならない。感謝なしでは，本当の人格者にはなり得ないと思う。受けている祝福に感謝の気持ちを抱くことは，真に優れた人格のひとつのしるしである。家庭に，日常の交際に，教会に，その他あらゆるところにこの感謝の精神がもっと必要である。そのための費用はいらないし，感謝の心を培うのは実に容易である。しかし，不満を抱き，他人をうらやむのもまた容易である。

私は昔，アイダホ大学に向かう途中でアイダホの片田舎のある小さなワード部に立ち寄った。そして私は，その夜そこで学んだ教訓を今でも忘れずに覚えている。私は美しいアイダホ州を8年間まわって歩いて，どの町にも，またどの村にも行ったことがある。2週続けて家を留守にすることも珍しくなかった。帰宅すると，ステーキ部の役員でもあったので，風呂に入って服を着替え，すぐにステーキ部の集会に出かけた。妻はよくこう言った。「あなたはいつも旅行に出ているか，集会に出かけているか，どちらかね」と。ある時などは，玄関先で小さな娘に「パパ，また来てね」と手を振られたものである。

私はいつも家族と離れて寂しかった。そしてその時は，アイダホ州のポカテロにいて，日曜日だった。私は遠くにいる家族のことを考えながら，「ホイットニーまで出れば聖餐式に出席できるだろう。そして，あそこの素晴らしい知人たちにも会える」と考えた。そこでホイットニーまで車を走らせた。着いた時には丁度監督が教会の中に引っ込もうとしていて，集会が始まるところだった。

彼は私を歓迎してくれた。入って来る人が見えるように，集会が始まる10分前には壇上に着席するのが彼の習慣だという。副監督たちは入口の所に立っていた。私は壇上にすわり，入って来る人々を見た。来る人々はみな家族連れで，どの人にも面識があった。大人を知っているので，子供はすぐにわかった。

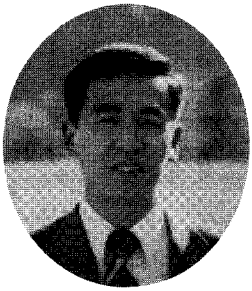
やがて副監督の司会で集会が始まり，私は短い話を頼まれた。そこで私はずっとこう考えていた。「毎日曜日家にいて，家族と教会に行けることは素晴らしいことではないだろうか。それはどんなに喜ばしいことか」と。副監督は私を紹介してこう言った。「兄弟姉妹，ベンソン兄弟のような仕事が持てたらどんなに素晴らしいことでしょう。いつもこのアイダホ州を巡回して，旅行続きです。」私は，「隣りの畑は良く見えるとはよく言ったものだ」と考えた。

私たちが自分の現在の状態を喜び，今この世で受けている祝福を感謝し，自分に課せられている義務を受け入れ，最善を尽くしてそれを果たすように，また他人をうらやまないようにと願うものである。

神は私たちが感謝の気持ちを持てるように助けて下さる。感謝を忘れる者はリンゴの木の下で実をむさぼりながら上を見ることをしない豚のようだという言葉があるが，私たちは受けている祝福の源を見上げているだろうか。

祝福を感謝し，感謝を忘れる罪を犯さないように，神は私たちを助けて下さる。

「およそすべてを感謝して受くる者には栄光を与えられん。而して，この世のものもまた彼に加えらるることすなわち百倍よりも多からん。」（教義と聖約78：19）



神様の導きと伝道の喜び

日本東京伝道部専任宣教師
（日本札幌伝道部
札幌第4支部出身）
岩山勝幸長老

10月6日，午後3時45分。私たちは駅の広場で伝道しようと出かけました。そこではすでに先に来たふたりの宣教師が伝道していました。

私たちは彼らと反対の方で伝道する予定でしたが，なぜかそのままその広場にいたいという気持ちにかられました。その時，ひとりの男の人が私の目にとまりました。そこで私が近づいて行くと，彼はベンチに腰かけました。学生のようでした。「この人に話しかけなければならない」と感じた私は声をかけました。「私は末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師です。お話してもよろしいでしょうか。」すると彼は，「私は聖書について知りたいんです。」「どうして多くの教会があるのですか。」「どの教会が正しいのですか。」と幾つかの質問を投げかけてきました。私はすぐにジョセフ・スミスのことを話しました。すると彼は，真理を求めている自分の心境と良く似ているその出来事に，深い興味を示しました。

その時に，「わが選民はわが声を聞き，その心を頑固（かたくな）にせざればなり」（教義と聖約29：7）という聖句が私の心に浮かんできました。約1時間ほど話したと思います。それから，レッスンの約束をして別れた後も，彼が特別な人のような気がしました。自転車に乗ってアパートに帰る途中，「彼はあなたが福音を伝えるよう前世で約束した人です」という心に響く声を聞きました。私はそんなことはないと打ち消そうとしました。けれども，そうすればするほど，その気持ちは強くなってきました。

3日後，教会でレッスンが始まりました。レッスンを重ねる毎に，彼の信仰が強くなっ

てくるのがよくわかりました。そして，10月18日にバプテスマのチャレンジをしました。それを，彼は快く受け入れました。その時，私は自分が感じている彼への気持ちを話しました。するとどうでしょう，彼も特別な気持ちを感じていたと言うのです。チャレンジを受けた彼は，その夜自分の部屋で祈り，これからは知恵の言葉などの戒めを守って生活をしようと決心しました。彼は神様が自分の祈りに答えて下さったことを感じ，「私の生涯でこんな霊的な日々は初めてです。」と証してくれました。

彼はその喜びを故郷にいるガールフレンドと分かち合おうと手紙を書きましたが，彼女は興味を示しませんでした。しかし彼は神様に彼女の心が開かれるようお祈りをしました。すると間もなく彼女から，「今教会に行って宣教師からレッスンを受けています」「とても素晴らしいところです」という電話がかかってきました。彼の証はさらに強まり，11月26日にバプテスマを受けることになりました。その一方で彼女もバプテスマを受ける準備をしていることを知りました。そして彼は彼女が宣教師と約束した日を聞いて驚きました。何と，自分と同じ11月26日だったのです。それを知った私たちも，神様の不思議な業に驚いたものです。私たちは互いに連絡してその日を選んだのではありません。断食と祈りによってその日を決めたのです。私自身はもっと早い日にバプテスマを施したい気持ちでしたが，なぜかその日を決めたのでした。

ところが，バプテスマの当日，私は体の調子をおかしくし，高熱に襲われました。水の中に入り，バプテスマを執行するのは私になっていましたが，開会2時間前の検温でも，38.5度あり，体を起こすのさえ苦痛でした。そこで，私はふとんの中で祈りました。

「天のお父様，今晩愛する高橋兄弟がバプテスマを受けられることを感謝します。今，体の調子を悪くしていますが，どうぞみこころでしたら，前世で約束した兄弟にバプテスマを施せるよう助けて下さい……」

お祈りのあとでひと眠りして，熱を計ったところ，37.5度でした。体の痛みはまだ残っていましたが，灌油の儀式を受ければできるという希望が湧いてきました。すると不意にふたりの長老が入ってきて，「さあ，灌油の儀式をしましょう」と準備を始めました。私が何も言わない先にやってきた神権者に驚きましたが，すぐに喜んでその儀式を受けました。こうして神様の不思議な導きを受け，バプテスマ会は無事に行なわれました。讃美歌を歌っていると涙が出てきてどうしようもありませんでした。熱も痛みも私の体から離れ去りました。神様は不思議なことをなさいます。

神様の導きがなければ，伝道は何もできないことがわかります。

末日聖徒イエス・キリスト教会は，ジョセフ・スミスによって地上に回復された神の教会であることを証します。

神様が生きていらっしゃることを，イエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。

「ほかの九人は，どこにいるのか」

（ルカ17：11—19）

イエスさまは，エルサレムへ行くために，サマリヤとガリラヤの村々を通られました。そのとき，ある村で，10人のらいびょう人（らいびょうという，ひふや体のかたちがくずれるびょう気にかかった人）がイエスさまに声をかけて言いました。

「イエスさま，わたしたちをあわれんでください。」

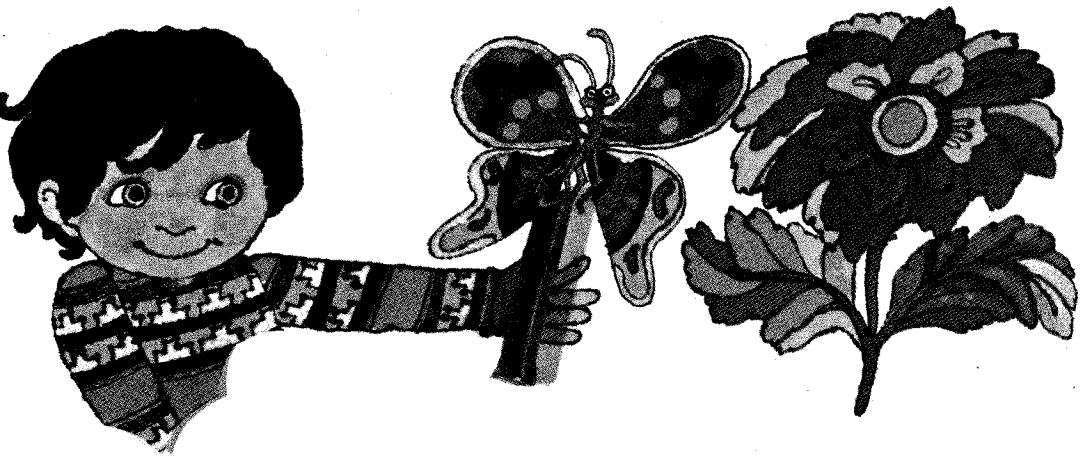
イエスさまは，かれらを見てかわいそうに思い，「祭司たちのところへ行って，からだを見せなさい」と言われました。すると，らいびょう人たちの体は，行くと中できれいになおってしまいました。

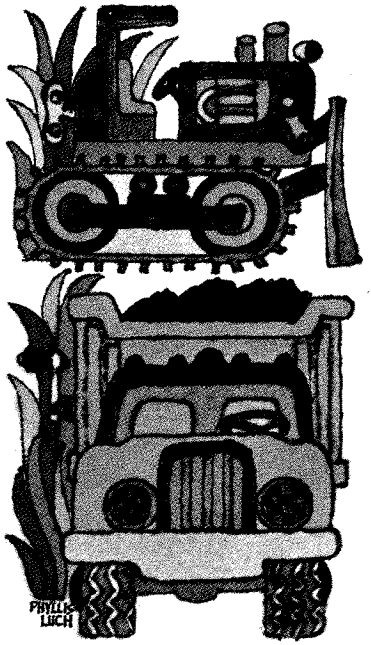
きれいになったじぶんの体を見た，ひとりのサマリヤ人は，大きな声で神さまにかんしゃしながら，イエスさまのところへ走って帰ってきました。そして，イエスさまの足もとにひざまずくと，心からかんしゃしました。

イエスさまは，そのサマリヤ人に，「きよめられたのは，十人ではなかったのか。ほかの九人は，どこにいるのか」と，お聞きになりました。

十人のうちで，体がなおったことを神さまにかんしゃしたのは，たったひとりだけでした。けれども，イエスさまはそのサマリヤ人にやさしく言われました。「立って行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのだ。」

ぼうきれの「ぼうくん」





おはなし：ベティー・ルー・メル

ぼくは　たくさんのぼうきれを　はこにいれて　もっています。すべすべしたのや　ごつごつしたの，ながいのや　みじかいのが　あります。

ぼくの　いちばんすきなのは，「ぼうくん」です。ぼくは，どこへゆくときも　ぼうくんを　ポケットにいれて　つれてゆきます。ぼうくんは小さくて　すべすべしていて，よるは　ぼくの　まくらの下で　ねます。ぼうくんは　ぼくの　だいすきな　おともだちです。

ある日，ぼうくんは　ぼくのポケットに　あなをあけました。ママがこわいかおで，「このあなはどうしたの」と　ききました。ぼくは，「いつ

のまにか　そうなったの」と　いいました。ぼうくんのせいだとはいえませんでした。

「また　あのぼうきれを　ポケットに　いれていたのね」と　ママ。ぼくは　だまって　ママの足もとをみていました。

「なぜ　あんなものを　もってまわるの。」

「だって　ママ，ぼうくんは　おともだちなんだもの。」

すると　ママは　いいました。「おともだちなら　しかたがないわね。」

ぼくは　ママが　だいすきなので，かなしませたくありません。「もうあなを　あけないでね。」ぼうくんにいいました。ぼうくんは　ただだまって　きいているだけでした。

いえのちかくに　のはらがあります。さんぽにゆくと，かわいい花にちょうちょが　とまっていました。ポケットから　ぼうくんを　とりだすと，ちょうちょが　とんできて　ぼうくんに　とまりました。それから　ぼくのてにも　とまりました。ぼくは　ぼうくんで　花をほりおこして，いえにもってかえって　にわに　うえました。ママが　とてもよろこびました。

「ママ　ごめんなさい。ポケットに　あなをあけたの，ぼくが　いけなかったの。」

ママは　ぼくのあたまを　やさしく　なでてくれました。ぼくは　ママが　だいすき。

ある日，すすむくんが　あそびにきて，ふたりでいっしょに　にわであそびました。

すすむくんは　シャベルをつかって　土の山を　つくりました。ぼくは　山にする土を　ぼうくんで　ほりました。ぼうくんは　どんどんあなをほります。そのとき，大きな石に　ぶつかって，ポキッと　おとがしました。ぼうくんが　おれたのです。ぼくは　おれたぼうくんを　くっつけようとしました。けれどもだめでした。ぼくは　なきだしたくなりました。でも，すすむくんが　いたので　がまんしました。

すすむくんが　かえったあと，ぼくは　ぼうくんを　そっとひろいあげました。

「ぼうくん　ごめんね。」

ぼうくんは　だまっていました。ぼくは　まえに　花をうえたところにゆき，あなをほって　ぼうくんをうめてやりました。

ぼうくんは　とてもよい　おともだちでした。いまでも，だいすきです。

かがく

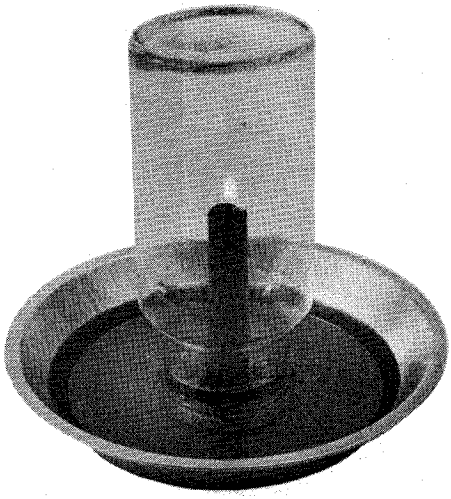
ろうそくとびん

ジェームズ・E・ハイヤー

さらか，あさいなべの底にとけたろうそくをたらして，ろうそくをしっかりと立てます。次に，そのさら（なべ）に水を入れて，火のついたろうそくの上に口の広いびんをかぶせます。そのとき，びんの口がさらの底につかないように10円玉などを下に置いて下さい。

1分ほどたつと，ろうそくの火が消えて，びんの中に水が上がってきます。

実験1：



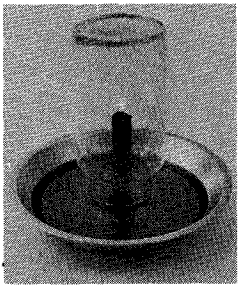
そのわけをお話ししましょう。まず，ろうそくがもえるとびんの中の空気があたたまって膨張します。それから，びんの中の酸素がぜんぶ使われてしまい，ろうそくの火は消えてしまいます。火

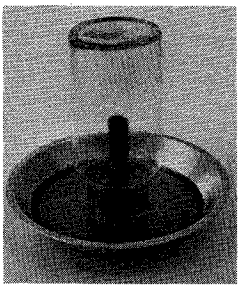
実験2：

もうひとつのじっけんをしてみましょう。

今度は，口の小さいびんを使います。同じように水の入ったさら（なべ）の中にびんをさかさまに立てます。両手でしっかりとびんをにぎりしめ，びんの中の空気をあたためるようにします。びんの中の空気が少しにげるので，びんの口からあわが出るのが見えるでし

が消えると，熱がびんや水にとられてしまうので空気は冷たくなり，空気はちぢんでびんの中をいっぱいにすることができなくなります。そして，びんの中の空気の圧力はびんの外の空気の圧力よりも小さくなるので，びんの外の空気が水をおして水が中に入って来るのです。



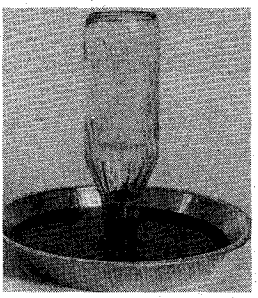


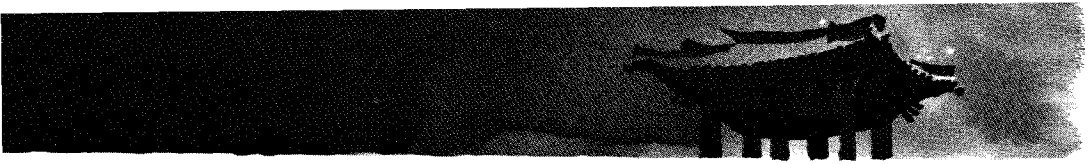
空気のおよそ5分の1は酸素ですから，その酸素がもえてなくなったらその分だけ水がもち上がるように思えるかもしれません。しかしじっさいは，もえた酸素は二酸化炭素や水蒸気になってしまうので，それほど水は上がりません。

ろうそくがもえてびんの中の空気があたたまってきた時，びんの口からあわが出てきましたか。

このびんのかわりに3倍の大きさのびんを使ったら，中に入る水のりょうは変わるでしょうか。

ょう。このときも水がびんの中に入ってきます。





よいとなり人　ソクタエ

おはなし：アノベル・アーマー

ソクタエは，ズボンのすそと，うわぎのそでをまくり上げると，田に入ってゆき，苗のたばをかた手に持って，1本ずつ，うえはじめました。

ソクタエの手は，たいこのひょうしにあわせるように，かるく，はやくうごきます。ところが，とつぜんソクタエの手がとまりました。どこからか，ふえの音が聞こえてきます。ソクタエは，頭を上げると，遠くをながめました。「ぎょうれつだ！ぎょうれつだ！」ソクタエはさけびました。

苗をほうり出すと，ソクタエはいちもくさんにかけだしました。「おお

い，まってよお。」そういって，ソクタエは，にぎやかなぎょうれつのあとについて，走ってゆきました。

苗のことを思い出したのは，それからしばくしてからのことでした。ソクタエは，きゅうにしんぱいになりました。「おかあさんは，なんていうだろう。」ソクタエはつぶやきました。

おかあさんは，家のげんかんのところに，妹をおぶって立っていました。

「いねの苗は，太陽のねつで，みんなかれてしまったわ。うちにはもう1本もないわ。」おかあさんはきびしい声でいいました。

「あの苗は，わたしたちが食べるお米になるのよ。」それから，おかあさんはかなしそうに，ソクタエを見ながらいいました。

「おかあさんは，あなたをしんじていたのよ。」

ソクタエは，大せつなしごとをほうり出して，あそんでしまったのです。けれども，今となっては，どうしようもありません。ソクタエは，おかあさんのしんらいを，うらぎってしまったのです。

ソクタエは，うつむいて，心の中で神さまにおいのりしました。「天のおとうさま，ぼくをたすけてください。」

そのとき，だれかがこちらへやってきます。それは，ソクタエにときどき畑しごとの手つだいをたのむ，となりのおばさんでした。おばさんは，ソクタエのお友だちでした。ソクタエは，かなしい気持ちをおさえて，おばさんにわらいかけました。

「ソクタエちゃん，おばさんのうちの田うえを手つだってもらえないかしら。」

おばさんは，門のところから声をかけました。

「去年きた男の子が，今年はこられないの。お手つだいしてくれたらお礼をするわ。」

ソクタエは立ち上がると，おばさんのあとについて行きました。「これで苗が買える」と，ソクタエは思い

ました。そうすれば，おかあさんもしんぱいしなくてすみます。

おばさんの家の田も，ソクタエの家の田と同じくらいに，せまい田でした。ソクタエは，いねの苗を田にはこぶと，そのうちのひとたばを右手に持って，水の中に入りました。そして，前のときと同じように，ちょうしをとりながら，ぬかった田に，1本ずつ苗をうえていきました。

苗をうえ終わると，ソクタエは顔を上げて，田から出てきました。そして，きれいに苗のうわった田を見て，にっこりしました。それから，おばさんの家に行くと，こういいました。

「ちゃんと，かんかくをせまくしてうえたのに，こんなに苗がのこりました。」

すると，おばさんはいいました。「ソクタエちゃん，持ってお帰りなさい。でも，すぐにうえないとかれてしまうわよ。」

ソクタエは，おばさんに心からかんしゃしました。うれしくて，うれしくてたまりません。おばさんはハンカチをほどくと，中からお金をとり出しました。

「さあ，これはおばさんがやくそくした，お手つだいのお礼よ。」

ソクタエは，口ごもりながらいいました。「ぼく，苗とお金の両方はいただけません。」

「でも，おばさんはやくそくしたんですもの。それに，苗はあまったものだから。」おばさんはこういうと，お金をさし出しました。

「ぼく，きょう，苗をほうり出して，ぎょうれつについて行ったんです。それで，苗をみんなからしてしまいました。」ソクタエは，顔を赤くしていいました。「だから，おばさんからいただくお金で買おうと思ったんです。でも，苗をいただいたから，もうお金はいりません。お金をうけとったら，2ばいのお金をいただくことになりますから。」

こういうと，ソクタエは頭をよこにふりました。おばさんは，にっこりして，お金をハンカチの中にしま

いました。そして，ソクタエを見ながらたずねました。「どこで，そんないい子になるように教わったの。」

ソクタエは，にっこりしてこたえました。「初等協会で，『あなたの隣り人を愛せよ』って教わったんです。」

「そうなの。初等協会で教わっていること，もっと知りたいわ。」

「いいですよ，あとでまた来ますね。」

ソクタエはおばさんにやくそくしました。そして，ふたりは顔を見あわせて，にっこりしました。

ソクタエは，いねの苗を手に持つと，走るようにして家に帰りました。ソクタエの心ははずんでいました。「ぼくのお友だちに，教会のことを話せる。もしかしたら，おばさんは，きょうみを持ってくれるかもしれない。そうしたら，宣教師からレッスンをうけてくれるだろう。」

ソクタエは，となりのおばさんのことを考えるだけで，うれしくなってきました。「もう，ぎょうれつが目の前を通っても，ぜったいについて行かないぞ。」ソクタエは，つぶやきました。

「ロージー」と，お母さんが呼んでいます。「ヒーマンといっしょに，お父さんのところへおべんとうを届けてちょうだい。」

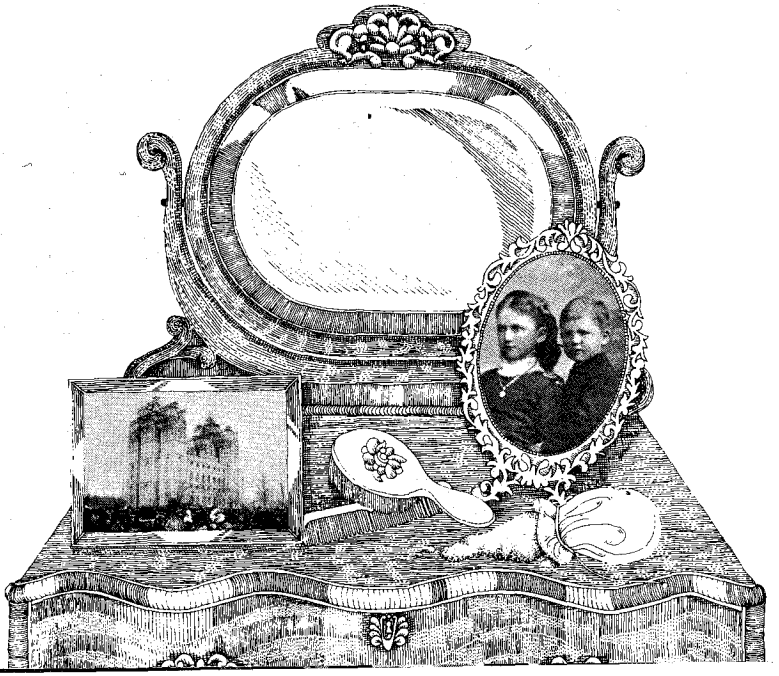
ロージーは，すぐに返事をしました。ふたりともこのお使いが大好きだったからです。お母さんは，お皿の上にあたたかい食べ物をたくさん盛って，スープ皿をかぶせました。そして，大きなナプキンでそれをきちんと包んで，かごの中に入れました。かごをふたりにわたすと，お母さんは言いました。「気をつけて持って行くのよ。途中で遊んだりしてはいけませんよ。それから，お父さんが食べ終わったら，すぐに帰っていらっしゃいよ。」

ふたりの家からお父さんが働いているソルトレーク神殿まで歩いて30分ほどかかります。お父さんはそこで，神殿工事のために石工として働いていました。

お父さんは，おべんとうを食べながら，ふたりといっしょに一日の楽しいできごとについて話し合います。そうすると，30分も歩いてきたつかれがうそのように消えてしまいます。ふたり

神殿のおがくず

話：ガートルード・M・リチャーズ



は，大きなみかげ石が峡谷の石切場から牛のひく車にのって運ばれて来るのを，おもしろそうに見ていました。車から石を降ろす間，牛はしっぽではえを追いながらじっと立っています。ごつごつした石のかたまりは，決められた形や大きさに切られてみがかれ，面に印がつけられて一列に並べられます。その後には，のこぎりの歯のようにとがった石の切れ片が残っています。ふたりは，きれいにみがかれた石の上を，はだしでかけ回りました。くつは，日曜日に教会へ行くときか，学校へ行くときにしかはきません。

うでのいいおじさんたちが，太陽や月や星の形に石をけずっていくのを，じっと見ていたこともあります。おじさんたちはみんな，左手に小さな鉄ののみを持ち，右手にかたい木でできた木づちを持って，けずりすぎないように少しずつコチコチと石をきざんで，きれいな形にしていました。

きょうは，お父さんからびっくりするような知らせがありました。「（神殿の中にある）らせん階段を作っているおじさんがね，できているところまで上がってもいいと言っているよ。でも，主の宮だから静かに上ぼるんだよ。」お父さんが言いました。

ロージーは，弟のヒーマンの手をとって，大きな石の階段を上ぼって行きました。上へ，上へ，息が切れるまで上ぼって行きました。下りるときは，上ぼるときよりずっと楽でした。それからお父さんは，大工さんの仕事場を案内してくれました。そこは，神殿のへやをつくる材木を加工するところです。床の上には，おがくずがたくさん落ちています。お父さんが言いました。「責任者のおじさんがね，お母さんに針さしの作り方を教えてもらうんだったら，おがくずを持って行ってもいいって言っていたよ。いつかきっと，そのおがくずで作った針さしを持っていてよかったと思うときが来るよ」

わたしたちは，いいにおいのするおがくずをかごいっぱいにつめて，急いで家に帰りました。けれども，お母さんはいそがしくて，すぐには針さしの作り方を教えてもらえませんでした。お母さんは，隣に住んでいるヤング姉妹のために洗たくとアイロンかけをしていたのです。赤ちゃんもだだをこねていました。ロージーは，赤ちゃんをあやして寝かせつけ，夕食のしたくを手伝いました。

夜になって，食事の後かたづけがすむと，お母さんが茶色のじょうぶな布を見つけてきて，その上に大きないちじくの葉っぱを書きました。そして，緑色の葉脈のししゅうとりんかくのかがり方を教えてくれました。次に，裏にする部分を切り抜いて，神殿のおがくずが入る位の穴を上の方に残して，

表とぬい合わせました。それからおがくずをいっぱいつめると，大切なおがくずがこぼれないように穴をていねいにぬい合わせました。針さしができ上がると，ロージーは得意げにそれをお父さんに見せ，そしてほかの大切な宝物といっしょにお母さんの化粧台の上におきました。

それからしばらくして，お姉さんに赤ちゃんが産まれるというので，お母さんは家のことをロージーに任せてアイダホに行きました。ヒーマンは，妹のアギーとバーディーが木の下で遊んでいる間，お父さんを手伝って庭の掃除をしました。ある朝，ロージーは，バーディーの着ているお古の服が色あせてすり切れているのに気づきました。そこで，新しい服を作ってあげようと思い，お父さんから布を買うために25セントもらいました。さっそくマクマスターさんのお店へ行って，かわいい，ピンクのチェックの布を買ってきました。布を床に広げると，神殿のおがくずの入った針さしから針を抜いて，古い洋服をその上にとめました。そして，洋服の型にそって布をていねいに切り，それぞれの部分をぬい合わせました。お父さんが仕事から帰ってくるころには，バラのつぼみのようにかわいい，バーディーの服ができあがっていました。

大人になってから，ロージーは洋裁店で働くようになり，お母さんや妹たちのために，きれいな洋服を作れるようになりました。しばらくして，おさななじみのジョディーが，ロージーに結婚を申し込みました。神殿のおがくずの入った針さしをじっと見つめながら，ロージーは，神殿で結婚したいと思いました。けれども，建て始めてから40年もたつのに神殿はまだでき上がっていませんでした。でも，ジョディーのお父さんは，ロージーたちがローガンへ行けるように，汽車の切符を買ってくれました。ローガンに神殿があったからです。そして，良く晴れわたった6月のある日，ロージーたちはローガン神殿で結婚式をあげたのでした。

神殿のおがくずの入った針さしは，ロージーといっしょに新しい家に引っ越しました。それからというもの，針さしはロージーの行くところはどこへでもついてまわりました。そして，この針さしは，ロージーの8人の子供たちに神殿が大切であることをいつも思い出させました。お父さんの言ったことは，正しかったのです。ロージーは心から，「神殿のおがくずで針さしを作ってよかった」と思うのです。

家族の祝福と喜び

日本横浜ステーキ部
大和支部
角田　進

私は1976年12月26日に，横浜の緑区から，大和市へ引っ越してきました。家の中はまだ荷物が一杯で，足の踏み場もないような状態の時，ふたりの外人が訪ねてきました。それまで外人と接したことのない私は少し驚き，何のセールスにきたのかと思いました。彼らの「モルモン」という言葉に，私たち家族は互いに顔を見合わせ，「一体，何者だろう」と考えました。彼らは「少し時間をいただきたいのですが」と言いましたが，私は「日本の国は今は年の瀬，そしてもうすぐ正月で忙しいからそんな時間は取れません」と断わりました。また，たとえ聞いても外人の話ではわからないだろうという先入観もありました。ところが彼らはとても熱心で，来年の訪問を約束して帰りました。「一度断わったのだからもう二度とこないだろう」と思っていたところ，約束通り，再び訪問してきました。私は日本人として約束を破ることは良くないと考え，ふたりを招き入れました。遠い国からやってきて，しかも無報酬で，私たちのためにどうしてこんなに熱心に教えを宣べてくれるのか，不思議でした。勉強が終わる度に，彼らは「続けて勉強なさいませんか」と言いました。私は彼らの申し出を受けて，さらに勉強を続けました。しかし妻は今ひとつ理解が足りないように感じました。そこで，私は，聖書の言葉を引用したりなどして，妻がもっと良く理解できるように助けました。その結果，妻も聖典の素晴らしい言葉に触れるにつれて，福音の価値を理解し始め，家族そろっての勉強が続きました。

やがて，バプテスマの面接を受ける日になりました。そして，初対面の宣教師から，いろいろ質問をされました。それに答えている時，私の心の中に「どうしてこんなわかり切ったことをまた答えなければならないのか」という高慢な気持ちが起こってきました。すると今まで勉強してきたことが，突然思い出せなくなり，その後の質問に何も答えられなくなってしまいました。そこで私は宣教師に，「今日はこれ以上お話ができないので，お引取り下さい」と頼みました。そして彼らは帰りました。するとその時，不思議な事が起こりました。私の体の自由がきかなくなってしまったのです。隣の部屋に行くのにも，足がもつれて大変でした。そんな私のみじめな姿を見て，妻は，「やはり神様は生きていらっしゃる。」とつぶやきました。

私は妻と子供たちを集めて，今まで宣教師たちから学んだことを思い出し，みんなで総復習をしました。そしてもう一度宣教師に来ていただき，面接を受けました。こうして，家族全員でバプテスマを受けても良いとの許

可をいただきました。

酒とタバコは，福音を聞く以前にも数回やめようと決心しましたが，いずれもできませんでした。しかし，宣教師のチャレンジを受けて「このチャレンジに応えよう」と決心すると，いとも簡単にやめることができました。定期的に通っていた胃腸科病院とも縁が切れる程，体調が良くなってきました。妻も子供たちも私の変わりようを見て，とても喜んでくれました。砂漠のような大都会の中で，兄弟姉妹の温かい愛を受ける機会をいただき，神様に深く感謝しています。私たちは家族がひとつの道を歩める祝福を喜んでいます。

神様は確かに生きていらっしゃって，この道が，真実永遠の喜びを与えてくれることを証します。

限りない恵みの中で

日本東京ステーキ部
ひばりヶ丘ワード部
宮坂 劭（たかし）

1976年6月の初め，陽はすでに大きく西に傾き，人気のない雑木林の枝の間から赤い光が斜めに射し込んでいました。私はその光を受けながら，落葉の積もった草の上にひざまずきました。祈りの効果を信じる気持ちはありましたが，それでもなお心の片隅に，無駄なことだ，自分は頭がおかしくなっている，すっかり弱気になっているのだ，という思いが残っているのでした。私は小さな声で祈り始めました。

「モルモン経は真実でしょうか。この教会は本当に回復された唯一の教会なのでしょうか。私たち家族が教会員となることは本当に正しいのでしょうか。ジョセフ・スミスに現われて下さったと同様に，どうぞ私にもみ姿を現わして，私たちが教会に入るべきかどうかをお教え下さい」と。もちろん御父と御子の訪れはありませんでした。けれども，祈り終えた私の心は非常に軽くなり，安らかな気持ちでその林をあとにしたのでした。

私がこの教会を知ったのは，このことがあった半年前の1月4日，ふたりの外人宣教師が私の家を訪問して下さった日のことです。上手な日本語で，イエス・キリストについてお話したいと言うのを聞いて，私は特別な気持ちになりました。というのは，この数年間に，妻の母親の急死と，私の父の病死に直面し，人生の目的，生と死について深く考え，また仕事(建築設計)の上で新しい確実な指針を得たいと願って，いろいろな思想，芸術，社会学の論文を読みあさっていたからです。特に，父の入院先の病院の牧師さんからいただいた新約聖書を取り出して読み，イエス・キリストの純粋な愛と生涯に心を動かされていたのです。

それから，週に一度のレッスンと，モルモン経の勉強によって福音の知識が増し，私はもちろん，妻とふたりの子供たちも次第に熱心になってきました。しかし，40年間かけて

築いてきた人生哲学や処世の物差しは，そう簡単には変えられません。迷いながらも，私はモルモン経を読み続けました。すると，それまでの人生経験と思考の末に悟った公式ともいうべき事柄が，モルモン経の随所に，それも単純明快に書かれているではありませんか。その上，疑問に思っていたことの回答も次々に得られるのです。こうしてモルモン経が真実の書物であることを感じ始めたのです。ところが，その気持ちとは別に，教会に入る決心は一向に着きません。それが逆に重荷となって，この教会が真実でなければよいがと，その証拠を求める有様でした。その結果私も，ジョセフ・スミスと同じように，神に直接願い求めてみようと考え，先に述べたように近くの雑木林に入って祈ったわけです。

それから10日程たって，突然私の心の中に，「宣教師に電話して，バプテスマを受けると言うように」という思いが湧き上がってきました。けれども私は，一生懸命にその気持ちを押しとどめ，電話をかけませんでした。しかし，そのことから教会に早く入る必要があるという気持ちは強くなったのでした。その後間もなくして，あっけに取られている妻を半ば強引に説き伏せ，決心の着かない長女には姉妹宣教師に証をしていただき，私たち家族はそろってバプテスマを受けました。これは7月のことです。

それまで，世の中を斜めに眺め，人生は無益な苦悩の連続だと考えて，すねて意欲を失っていた私でしたが，少しずつ生きる喜びと，人間への信頼と愛がよみがえってきました。また，それまでに得た人生の経験と知識が，まるでプラモデルを組み立てるように，組み合わされるのを感じ，与えられている恵みに感謝して毎日を過ごしました。

教会に入って10ヵ月が過ぎた頃のことです。私は自分の欠点を正し，また自分のなすべき仕事を求めて断食をし，祈りました。その結果，正直であること，人の言うことを素直に聞くこと，肉体のコントロールをよく行なうことの必要性を感じました。また，丁度その日はステーキ部大会の土曜日の集会の日に当たっていました。その集会後，私は菊地ステーキ部長（現在七十人第一定員会会員）に呼ばれました。私を七十人に召したいとおっしゃるのです。私はとても驚きました。経験の浅い私に，そのような重い責任が果たせるのだろうか，私は圧倒されそうでした。けれどもその時，自分のなすべき仕事は七十人として行なう伝道の仕事であることを知ったのです。それが祈りの答えなのです。私は欠点を改めて全力を尽くして働くようにという神の期待と深い愛を感じて，その召しをお受けしました。

苦しい時，悲しい時に互いに励まし合い，助け合ってきた妻と，強い意志と正義感を持った12歳の長女，それに才能に恵まれたやさしい7歳の次女。私はこの家族のために麗しい福音と完全なプログラムがあることを心から感謝しています。昨日よりは今日，今日よりは明日と，少しずつですが福音に改宗できる道が備えられ，その道標として回復された教えがあることを心から喜んでいます。限りない恵みを日々受けていることを感謝しています。特に，子供たちが幼い時から正しい生活を送り，やさしさと強さを身につけられることは素晴らしいことです。子供たちを自信をもって導くために，教会は私にとってどうしても必要です。神の数々の恵みに少しでも応えるために，全力を尽くして神の王国を築く業に励まなければならないと思っています。多くの人々にこの福音のもたらす人生の喜びを味わっていただくために，私たち家族はできる限りの奉仕をしたいと思います。今まで未熟な私を辛抱強く導き励まして下さった指導者の方々，すべての兄弟姉妹に心から感謝します。イエス・キリストのみ名により証します。アーメン。

証を得る門を開く

セオ・E・マキーン

私が人から受けた教訓の内，最も印象深く心に残っているものに，若く美しいひとりの女性から受けた教訓がある。彼女は私たちと一緒に生活しながら，ブリガム・ヤング大学へ通って勉強をしていた。彼女は全盲であったが，その能力は，知的な面でも霊的なな面でも，群を抜いていた。電話番号も，たった一回尋ねればそれですんだ。決して忘れなかった。また彼女は，私の妻や他の人々から宿題の本を読んでもらった。しかし一度読んでもらうだけで，テストの得点がクラスで最高というのも珍しいことではなかった。

私も当時，大学生であったため，各学期の初めに，彼女と盲導犬を新しい教室に連れて行ったものである。しかし一度連れて行けば，彼女にはそれで充分であった。同じように，彼女は福音の原則も，ただ一度学べばそれでよかった。いつでも，どこでも，その教えに従って，信仰深く生活していた。

私は彼女から，ドアの開閉に関連して教訓を学んだ。彼女は聴覚が極めて発達していたため，自分の足音の微妙な反響で，自分がどのドアに近付いているかがはっきりとわかったのであった。そして，ドアが半開きの状態にさえなっていなければ，まっすぐにドアの所まで歩いて行けた。ところが，だれかが不注意にドアを半開きのままにしておくようなことがあると，彼女はまごついてしまうのだった。

怠慢による失敗

主は，私たち主の子供たちが，人生のドアを善に対して開き，悪に対して閉じておく時最も喜ばれる。古代のラオデキヤに住む教会員に対し，主は次のように言われた。「わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく，熱くもない。むしろ，冷たいか熱いかであってほしい。

このように，熱くもなく，冷たくもなく，なまぬるいので，あなたを口から吐き出そう。」（黙示3：15—16）

学んだら，学んだことに従って生活する

教えることの最大の目的のひとつは，善悪の違いに気付かせることである。すなわち，自分の人生に何を取り入れ，また何を拒んだらよいかを知ることである。しかしながら，私たちに与えられている最大のチャレンジは，真理を学ぶことよりもむしろ，ひとたび真理を知り，理解したら，それに従って生活するということである。

主は，ラオデキヤに住む教会員の不信仰を叱責されると共に，み言葉に従って生活していたヒラデルヒヤに住む教会員をほめられた。「ヒラデルヒヤにある教会の御使に，こう書きおくりなさい。『聖なる者，まことなる者，ダビデのかぎを持つ者，開けばだれにも閉じられることがなく，閉じればだれにも開かれることのない者が，次のように言われる。

わたしは，あなたのわざを知っている。見よ，わたしは，あなたの前に，だれも閉じることのできない門を開いておいた。なぜなら，あなたには少ししか力がなかったにもかかわらず，わたしの言葉を守り，わたしの名を否

まなかったからである。

忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから，わたしも，地上に住む者たちをためすために，全世界に臨もうとしている試練の時に，あなたを防ぎ守ろう。」（黙示3：7—8，10）

学ぶ側にも責任はある

教授と学習の過程を完全なものとするためには，教える者と学ぶ者の双方に，どうしても果たさなければならない重大な責任がある。

教師は生徒に福音の勉強を促し，生徒の学んでいることが真実であると証し，また生徒一人一人に福音を自分の生活に取り入れるよう勧めなければならない。それと共に，受け入れるか拒むかを決めることのできる，生徒自身の完全な権利と責任をも尊重しなければならない。

一方，学ぶ側でも，ひとたび真理の原則を求めて聖典や神の生ける予言者の言葉を研究し，その結果，聖典の力によってこれらの原則が真実であることを理解したならば，次には自分自身でそれに従う決意をする責任がある。最終的にそのように決意することは，生徒の学習の過程を完全なものとするために必要欠くべからざることである。（「聖徒の道」1977年4月号p.27，「教授と学習の関係」の図を参照）

学習は，「善悪を弁え……一切の善いことをつかんで」（モロナイ7：19）はじめて，完全な姿を取るのである。

喜んで従う

ヨシュアはイスラエルの民に向かって次のように言った。「あなたがたの仕える者を，きょう，選びなさい。ただし，わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」（ヨシュア24：15）

ナサン・エルドン・タナー副管長は，ヨシュアの言葉を次のように解説している。「あなたがたとは，選択はあなたがた一人一人にかかっている，そして自分の選択とそれに伴う結果については全責任を負わなければならないということである。仕えるとは，単に消極的に受け入れたり，口先だけの奉仕をすることではない。その言葉の意味するところをことごとく受け入れることである。者とは，自分が仕える相手，あるいは神を指す。きょうとは，今こそ選びの時であり，自分の行く末を決める時であるということである。明日ではない。明日などはなく，あるのは今日だけである。選びなさいという言葉は，私たちには自由がある，選択する権利と特権がある，という意味を含む。」（*Church News*「チャーチニューズ」1963年6月8日，p.13）

時折，私たちは，今日の世の中に誤りと悪がひどくはびこっていることを考えて，失望を感じる。しかし，私たちは，今は主のみ言葉が全地に充ち満ちる時でもあることを忘れてはならない。私たちは，福音が与えられている恵まれた時代に生活しているのである。私たちに与えられているチャレンジは，それを学び，それに従うことである。そのような生活をすれば，最終的には，必ず現存の邪悪に打ち勝つことができるのである。

「現在，主は，この時代について，大管長会を頭とする生ける予言者たちを通じて，全地の住民に，とりわけ教会員に，そのみ心を明らかにしておられる。大管長会が語ることは，主が自らこの地上におられたならば言われるはずの言葉である。……従って，その言葉は，教義と聖約や他の聖典中の啓示と同様，研究し，理解し，従っていくべき言葉なのである。……

現在は，真理と偽りとの間で大きな争いのある時代である。……真理と偽りとを区別できる確かな方法は，ただひとつしかない。それは，これらの事柄について御父はどのように考えておられるか，よく学び，そしてその教えを実践することである。」（マリオン・G・ロムニー*Conference Report*「大会報告」1945年4月，p.90—91）

私たちには答えがある

福音には，私たちの当面するチャレンジに対する答えがある。そして，教師として私たちが応えなければならないチャレンジは，生徒が各自の生活で充分に福音を実践できるよう助けを与えることである。

ニール・A・マックスウェル長老は，この点について次のように言っている。「私たちは，親として，また教師として，青少年にこれまで以上に大きな助けを与えなければならない時期に来ている。青少年に，福音と現実の世界の問題との間には深い関連があり，また福音には人間の問題を解決する力もあるということを理解させなければならない。」（1970年夏，ブリガム・ヤング大学においてセミナリー・インスティテュート職員を対象に行なわれた説教より。今月号の記事「福音により人生の問題を解決する」p. 37 参照）

実行することは知ることである

福音を熱心に研究する時に，何を行なうべきかがわかるようになる。そして，それを実行する時に，それが真理であることがわかるようになる。「実行」するかしないかの鍵は，私たちが従順な者となるかどうかの選択にかかっている。

マリオン・G・ロムニー副管長は，それを次のようにまとめている。

「現世の人間はふたつの面を持った存在であり，この死すべき世で，ふたつの相反する勢力の影響下に置かれている。一方で神の影響力は，人に霊感と励ましを与え，生命の道に従わせようとする。もう一方では，サタンの力が，人に，神の戒めに対し不信を抱かせ，それを無視させようとしている。そして人は選択のいかんによって，すべてを手中に収めるか，すべてを失うかのどちらかの結果を被るのである。人がこのふたつの相反する力の影響下から逃れる道はない。必然的に，どちらかの影響を受けるのである。人には，神から与えられた自由意志によって選択する力があり，選択は人自らがしなければならないのである。」（*Conference Report*「大会報告」1962年10月，p.94）

主の勧告

私たちの救い主は，古代におけると同様，現代の私たちにも勧告を与えておられる。主は，古代のラオデキヤに住む聖徒たちに次のように言っておられる。

「すべてわたしの愛している者を，わたしはしかったり，懲らしめたりする。だから，熱心になって悔い改めなさい。

見よ，わたしは戸の外に立って，たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら，わたしはその中にはいって彼と食を共にし，彼もまたわたしと食を共にするであろう。

勝利を得る者には，わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど，わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である。

耳のある者は，御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。」（黙示3：19—22）

黙示者ヨハネは，このみ言葉を記録したあと，続けて次のように言っている。「その後，わたしが見ていると，見よ，開いた門が天にあった。」（黙示4：1）

私は，私たちすべての者が努力次第でそのように開かれた門の前に立てるということを証申し上げる。それが実現するように，イエス・キリストのみ名により，お祈り申し上げる。アーメン。

☆　　☆

福音により人生の問題を解決する

ニール・A・マックスウェル

（1970年夏，ブリガム・ヤング大学においてセミナリー・インスティテュート職員を対象に行なわれた説教よりの抜粋）

私は，教会の青少年はどのような人々であるか自分なりに考えていることを，ここで包括的に紹介したいと思う。……

私は，この神権時代が始まってこの方，この教会に質的にも量的にも，今程選り抜きの青少年が多数存在する時代はないと信じている。彼らは固く決意し，奉仕の精神を持ち，福音が真実であると信じ，その証に従って生活を律し，しかもなお，困難な選択にもひるまないという意味で，選り抜きなのである。知識の面でも決意の固さにおいても，彼らは抜きん出ている。しかしながら，教会の青少年がひとり残らず，今申し上げた状態にあるわけではない。活発で頭が良く，感化力が非常に強いものの，選り抜きと呼ばれる程には福音の教えに精通していない若人がその大部分を占めている。また一方で，反抗したり，反対したり，離反したりする者もいる。教会の青少年とは言っても，皆さんの担当する青少年は，選り抜きの者から反抗する者まで，実に様々である……

関連づけることの重要性

私たちは，親として，また教師として，青少年にこれまで以上に大きな助けを与えなければならない時期に来ている。青少年に，福音と現実の世界の問題との間には深い関連があり，また福音には人生の問題を解決する力もあるということを理解させなければならない。……

つまり，青少年にはまだその関連づけがはっきりしていないということである。福音は単に語ればよいというものではなく，実践する必要があるということを彼らに気付かせる必要がある。さらにまた，福音によってどのように人生の問題が解決できるかを知り，これまで以上に確実に，上手に，しかも霊的に，福音を家庭生活に取り入れなければならないということである。

教会の青少年は平和を作り出さなければならない

教会の青少年の役割を考えてみよう。青少年は現在次のような矛盾を抱えている。まず，一方で，聖典や予言者たちを通じて，地上から平和の取り去られる時が速やかにやって来ると教えられていること。私たちはこのことをよく知っておかなければならないし，無知ではいられない。ところがもう一方で，その同じ聖典や予言者を通じて，平和を宣言し，平和を作り出すという責任も負わされているということである。このふたつの教えが一見相矛盾しているように見えようとも，青少年はいつもそれを心に留め，世の事柄に慎重に対処できるような生き方を求めなければならない。この世には，二度と平和の訪れることがなくとも，それでも平和を作り出す者とならなければならないのである。ところが，青少年は，教会で一部の大人がしているように，とても承諾しかねる行為をとる可能性がある。

それは，現代のヨナになるということである。つまり，ニネベに災いが下るのを予言した後，自らは山の小屋に逃げ込んで，高みの見物を決め込むという生き方である。救いよりもむしろ災いを強調するといったヨナの生き方を主が，愛情をもって，しかしはっきりと叱責されたことには深い意味がある。教会の青少年は，たとえ災いが迫って来るのを感じようとも，できる限りの力を尽くして，自分たちのニネベの中で働かなければならない。責任を解かれるまで，その職務から離れるようなことがあってはならないのである。大人とても同様である。私たちはヨナのように安穏と暮らすことはできない。自説の正しさを立証するために，災いが現実に起こるよう望むといった生き方はできないのである。

リーハイの例はそのことをよく教えている。リーハイは，過去の経験から，息子たちの内のふたりは大成しないであろうということに気付いていた。しかしそれでも，リーハイは死ぬまで，このふたりを愛し，祝福し，勧告し，仕え続けたのである。私たちはこの生き方を模範としなければならない。また，現代のニベネに生きる青少年もこの生き方を模範とする必要がある。私たちは，ヨナのように，タルシシに逃げ出ていやな仕事から手を引こうとするようなことがあってはならない。山に登って，災いが下るのを待っていることは許されない。主が指示される限り，委ねられた職務から離れてはならないのである。このことは，大人の中に実際に良い模範を示している人がいれば，教会の青少年にとって，それ程難しいことではない。しかし，だからと言って，数々の予言や実際の出来事に無頓着でいてよいということではない。それでも，少なくとも，あまり急いで山に駆け上らないようにしようではないか。……

愛の力

ワシントンD.C.に私の親友がいるが，数ヵ月前のこと，彼が家に帰ると，丁度強盗が押し入っていたところであった。友人はそこでやや軽率に，強盗と格闘を始めてしまった。その時，強盗の撃った銃弾が友人の脊椎骨に当たり，そのために，彼は生涯，下半身不随の身となってしまった。それまで強壮で屈強な体格を誇っていた友人の生涯は，一瞬の内に暗転してしまったのである。私は，その惨事の直後，病院に彼を見舞い，丁度教会でするように，慰めの言葉をかけようとした。ところが私が反対に慰められて病院を出たのであった。彼は，赦しの問題で必死に悩んだ末，ようやく犯人を赦せるようになり，もう恨みも持っていなければ，憎しみも抱いていないと，涙ながらに言えるようになっていたのである。そこにあるのは，愛だけであった。これは，永遠の兄弟愛というものを信じていなければ，とてもとれる態度ではない。さて，私たちは「兄弟愛」という言葉を使う時，その使い方を，もっとひんぱんに青少年に教える必要がある。また，その中に含まれている意味も説明する必要がある。そうしないと，彼らは，そうした高尚な言葉が，ちまたで使われているのと同じような意味でしか使われていないと思い込んでしまうからである。神が御父であるという時，私たちは何か到達不可能な超生命力のようなものについて語っているのでもなければ，人類にしたい放題のことをさせ，まるで構わない優しいおじいさんのような方について言っているのでもない。私たちの言う御父は，愛の深い御父ではあるが，必要とあらば，私たちに厳しい経験をも

させる御父である。それは，御父が私たちを深く愛しておられるので，その独り子が体験されたように，私たちにも苦しみや悩みを体験させ，それによって，御父や私たちの勝利と知識が完全なものになるということを教えるためである。御父が愛の御父であるということが，世間の考え方と比較してどのような意味をもつかよく理解することは，青少年にとって極めて重要である。

学習の4形態

私たちは普通4つの異なった教授法に従って，学んだり教えたりしていると思う。この4つはいずれも必要であり，適切なものである。しかし，互いに調和をはかることが必要である。その第一は，訓戒である。教会ではこれはよく行なわれている。訓戒を与えることは多いし，また必要である。次は説明である。これも多く，また必要である。3番目は模範である。実物による教授が一番良いことはだれもが承知している。ある作家は，「現在，青少年が応じる唯一の道徳上のよりどころは，模範しかない」と言っている。4番目は体験である。ところが，家庭でも，日曜学校のクラスでも，あるいはインスティテュートやセミナリーでさえも，後半の2点に対しては，やや消極的な態度が見られる。私たちは，訓戒や説明には非常に重きを置いているし，またそうすることも当然である。しかし，学習する立場から言えば，調和をはかるためには，これまで以上の模範と，これまで以上の体験が必要である。私が懸念していることを率直に申し上げるが，アロン神権者たちは，自分たちの行なわなければならない奉仕活動は，ただ日曜日に聖餐を祝福し，パスすることだけであると思い込んではいないだろうか。私は，アロン神権者が未亡人の家のごみ箱を運び出したり，雪かきを行なったりする光景をもっと目にしたいと思う。そうすれば青少年は，福音とその実を実際に体験し，福音が真実であることを知るようになるであろう。そして，だれからも教えを受ける必要がなくなる。青少年が自分で体験するからである。ニーファイ第3書を読むと，イエスがアメリカ大陸を訪れた時，群衆はイエスに近づいて，「各々みな目で見，手で触れて」「その手をイエスの肋にさし入れ」「釘あとに触れた」と記されている。群衆は自ら体験し，福音が真実であることを知ったのである。これこそ，アルマ書32章に言われている，完全な知識を生み出す試みである。私たちはそれが真実であることを自分の体験から知っている。しかし，実際の体験を得させようとして教会の教室を空にするわけにはいかないことも承知している。けれども，教室というわくを越えて，福音の原則を実際に応用できる直接体験を得るようにしなければならない。これらの体験から，教会の青少年は，霊的な経験という倉を建て，丁度教会員が貯えておいた食糧や衣服を取り出して来るように，必要な時にいつでもそれを引き出せるようになるのである。人には皆，その生涯に，霊的な体験という倉から貯えを引き出さなければならない時期がある。私たちの中には，その倉がほとんど空の者もいるし，いまだかつて貯えたことのない者さえもいる。私たちは，教会の青少年が知的な問題で悩む時に備えて，いつでも貯えを引き出せる状態にしておかなければならない。そうすれば，彼らは過去の経験から，福音が真実であることを体験的に知るであろう。

寛容な青年たち

次に，私が骨を折った末ようやくのことで学んだことについてお話したいと思う。皆さんの教える対象が，青少年ではなく，その親である場合もあるだろう。今日，その点に関してひとつ申し上げるとすれば，それは，現代の青少年が，以前の青少年に比べて，仲間の起こした間違いを公然と非難するということに関してははるかに消極的だということである。だからと言って，現代の青少年が必ずしもそうした行ないを肯定しているというのではない。これはなかなか理解し難いかもしれないが，大変重要なことである。現代の青少年ははるかに寛容であって，仲間がなにか悪いことをした時でも，すぐには見放さないのである。これを見て，大人の中には，それは黙認ではないかと思う人もいる。しかし，そうではない。彼らは仲間を認めないと同時に，やりこめもしないのである。私は親として，自分の息子や娘が，身の回りで起こっていることを公然と非難する時があってもよいのにと思うことがある。しかし，子供たちと静かに，しかも愛情を持って話し合ってみてわかったのであるが，彼らはそうすることを好まないのである。彼らは仲間をやり込めたりすることを好まないのである。大人が理解しなければならないことは，青少年は，仲間の行為に憤りを感じても，私たちが望む程，率直にはそれを表に現わさないということである。従って，彼らがそのような態度をとったからといってすぐさまそれを肯定しているのだと受け取ったりすると，手痛い過ちを犯すことになる。

聖典は讃美歌集のようなもの

最後に，青少年にひとりで聖典を読みたいという気持ちを起こさせる新鮮な方法を考え出して欲しいと願っている。思うに，聖典は，讃美歌集にたとえると一番はっきりと理解できるのではないだろうか。つまり，讃美歌集の歌は皆，長年にわたってその有効性が実証されてきた曲ばかりである。しかし，私たち大人は，自分の好む曲を数曲，いつも繰り返し繰り返し歌う。その曲は，青少年には気に入らない曲かもしれない。ある意味では，聖典も讃美歌集と同じである。歌ったり聴いたりしなければならない曲は数多くあるが，私たち大人の好きな曲が，必ずしも，青少年の好みに合うわけではない。一人一人自ら聖典を読むことによってはじめて，今日その必要に応じて語りかけてくれる聖句を見つけ出すことができるのである。どれ程念入りに学習計画を立てようとも，個人の要求に100パーセント応えてやることはできない。自分で讃美歌集を開け，音楽を聴かなければならないのである。聖典は，いつも目の前にあって，語りかけ，ささやきかけてくれる。しかし，時には，自分ひとりで勉強しなければならない時もある。青少年のそのような要求を大人が完全に予想するということはできないことだからである。……

私たちは王国の困難な責任を引き受けている。そして事実，そのように感じる日もあることだろう。そのために，今日，この定められた時に，神が皆さんを現在の職務に召して下さったということに対して，特別に感謝の気持ちを抱くことが必要である。神がこのために私たちを祝福して下さるよう，この教会の頭であるイエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。

捕われの宣教師

副編集長　メルビン・レビト

1942年5月15日，ピート・フラムは妻にキスをして，「明日帰って来るから」と言い残して家を出た。オランダの春うららかな田園地帯をアルンヘムに向かう汽車の中で，彼は責任のことを考えていた。オランダ伝道部の第二副伝道部長という重責を思うと，耐えがたい思いであった。

不幸にも，この旅行は避けることができなかった。当時オランダはドイツの占領下にあり，退役海軍士官であった彼は，他の士官と一緒に，アルンヘムで登録をするよう義務づけられていたのである。

このような登録はこれまでも度々行なってきたことであった。そのため，やっかいではあったが，いつものこととして別に気にもし

ていなかった。彼は窓の外を飛ぶように過ぎてゆく緑の畑をながめていた。しかし，一泊の予定のこの旅が，実に3年間の捕虜生活へ向かう旅になろうとは彼は夢にも思っていなかった。

アルンヘムに到着すると，オランダの士官は全員捕虜として列車でドイツに連行されると通告された。ピートは，夜の暗闇の中を，列車に揺られてランクバッサーの捕虜収容所に向かった。しかし，彼の心は，人いきれのする狭い車両とは別の世界をただよっていた。「なぜ，私が捕虜に？」沸々と疑問が湧きあがってくるのだった。主は彼を副伝道部長に召された。彼は必要とされている人であった。その彼がなぜ捕虜として連行されなければならなかったのか。列車のガタゴトという音が，「なぜ，なぜなのだ」と繰り返し問うているようであった。しかし，答えはなかった。

ピートは強い信仰の持ち主であり，実際に答えを必要とはしていなかった。いずれわかるだろうと，彼は考えていた。

それからしばらくして，彼はその捕虜生活が教会史上特に困難な伝道の召しの中で最も輝かしいものとなったことを知ったのであった。

ランクバッサーの収容所に入ってから間もないある日のこと，ピートが不潔なバラックを出て草の上で横になっていると，そばにいた仲間のひとりが，宗教についてピートに問いかけてきた。ピートは彼が疑問に思っている事柄にすべて答えた。これがきっかけとなり，やがてこの収容所で伝道のレッスンが始まった。

程なくして，教会について話を聞きたいという人々が大勢現われた。しかし，監視員の目があるため，大勢を集めて話をすることはできなかった。そこでピートはふたりずつ選び，彼らと一緒に収容所内を散歩しながら，教会について話をすることにした。

それから数ヵ月して，捕虜たちは，ロシアとポーランドの国境近くにあるスタニスラフに移された。ここでもピートは，散歩をしながら福音を説き続けた。

中でも熱心にピートの話に耳を傾けた捕虜たちが，礼拝行事を行なえないだろうかと尋ねてきた。そこで，収容所の端にあって使われていない建物を集会所に定め，窓を毛布でおおって，秘かに礼拝行事を行なうことになった。古い石けん箱が彼らの説教台であった。特別な集会を聞くことが固く禁じられていたために，何事も秘密の内に行なわなければならなかった。

こうして開かれた礼拝行事は，通常のものとはやや異なっていたが，常にみたまに満ちていた。開会と閉会の讃美歌は歌わずに，歌詞を読むだけであった。監視員に聞かれるの

を恐れたからである。その上，礼拝行事が終わると，ひとりずつこっそりと出て行かなければならなかった。

有刺鉄線に囲まれた収容所の中では，福音の原則が厳格に守られた。断食日曜日には，配給されるカップ一杯の豆をほかの仲間たちに分け与え，空腹に耐えながら彼らは断食した。そして，彼らの多くは，空腹で眠れないため夜を徹して祈り，その結果福音の証に目覚めたのであった。最も懐疑的であった求道者のひとりは，そのような断食の夜に証を得た。翌日，涙で頬をぬらしながら壇上に立った彼は，言い尽くしがたい平安な気持ちを得ていることを証した。そして，日曜日の集会のために自分にも少し手伝わせてほしいと，謙虚な態度で願い出たのである。ピートが彼に，毎週床掃除をしてほしいと頼むと，彼は名誉な務めであるとそれを承諾した。「この部屋においでになるあなたは，聖なる神権者ですから。」

また，ＭＩＡについて話すと，彼らは是非自分たちも組織したいと語った。そこでピートはＭＩＡを組織して，会長会と書記と教師を召した。彼らはその集会で教義と聖約を学んだ。後にピートは，彼らの講義以上に素晴らしいものを聞いたことがない，と語っている。

収容所内を散歩しながらの福音の講義が何ヵ月も続き，人々は次第に福音に対して強い証を持つようになった。彼らは信仰によって耐え忍ぶことができた。ピートを深く敬愛する彼らは，ある復活祭の朝に，「信仰」という創作曲を贈ってピートを驚かせた。この曲はその後，オランダ伝道部の歌集に入れられた。

終戦間近に，捕虜たちはドイツのノイブランデンブルクに移されたが，ここでも教会活動は続けられた。そして1945年４月28日，ソ連軍の戦車が有刺鉄線を押し倒してこの収容所に突入し，捕虜は自由の身となった。それから数週間後，ピートは妻子の待つ家に帰った。また，福音を喜んで受け入れた仲間の捕虜たちも，飢えや寒さや南京虫などものともしない価値ある素晴らしい贈物，福音を携えて，それぞれの家路に着いたのである。

その後，彼らの内の７人がバプテスマを受け，彼らと共に多くの家族が改宗した。そして捕虜仲間からの改宗者のひとりが，後に，オランダステーキ部の初代ステーキ部長に召されたのであった。

ピート・フラムは，どのような状況にあっても自分の義務を完うしようとする強い意志の持ち主であった。自分の伝道部から連れ去られた彼は，別の場所で自分の使命を果たし，多くの人々に永遠の喜びをもたらしたのである。

必ずしも速い者が競走に勝つのではなく，

ウイリアム・G・ダイヤー

人生の競走

オリンピック競技を見て，その選手の能力に驚きの目をみはらない者はいないだろう。私たちのだれもがそのような優れたオリンピック選手になれるわけではない。しかし，すべての人が参加しなければならない競走がある。それは人生の競走である。人生の競走では，自分より力のある人，能力のある人，技術の優れている人，そのような人がいるのではないかという不公平のようなものを感じることがある。しかし，次の聖句から私たちは慰めを得る。「必ずしも速い者が競走に勝つのではなく，強い者が戦いに勝つのでもない。」（伝道9：11）このほかにも，聖典の随所に，最後まで耐え忍ぶ者が等しく救われるということが述べられている。人生は100メートル競走のような短距離競走ではないし，中距離競走でもない。言わばマラソンである。長距離競走なのである。主はこう言っておられる。「重ねて言う，わが願うは終りまで忍ぶ者のみ救わるるを汝の知らんことなり。」（教義と聖約53：7）最後まで耐え忍ぶ者だけが救われるという事実は，教義と聖約の中だけでも12ヵ所に記されている。

私は人生の競走についてお話したいと思う。この競走はこの世に生を受けた時から始まり，時として苦しいものである。そして，自分の言動に責任を持たなければならない年齢になった頃から，本当の勝負が始まる。十代の頃から人生のマラソンは上り坂にかかる。高校時代のことを振り返ると，あなたにも思い当たることがあるであろう。

ほとんどの人が十代の頃のことをはっきりと覚えているものである。そして，30代，40代になっても，苦しかった高校時代のことを忘れない。あの頃はまだ小さくてやせていたので，あるいは，眼鏡や歯列矯正器をつけなければならなかったので，また顔中にきびだらけだったので競走するのがつらかったことを思い出すことだろう。このようなことすべてによって，苦しい十代を送っていたあなたは悩み，自分より背の高い人，強い人，美しい人を見てねたましい気持ちを抱いたことだろう。

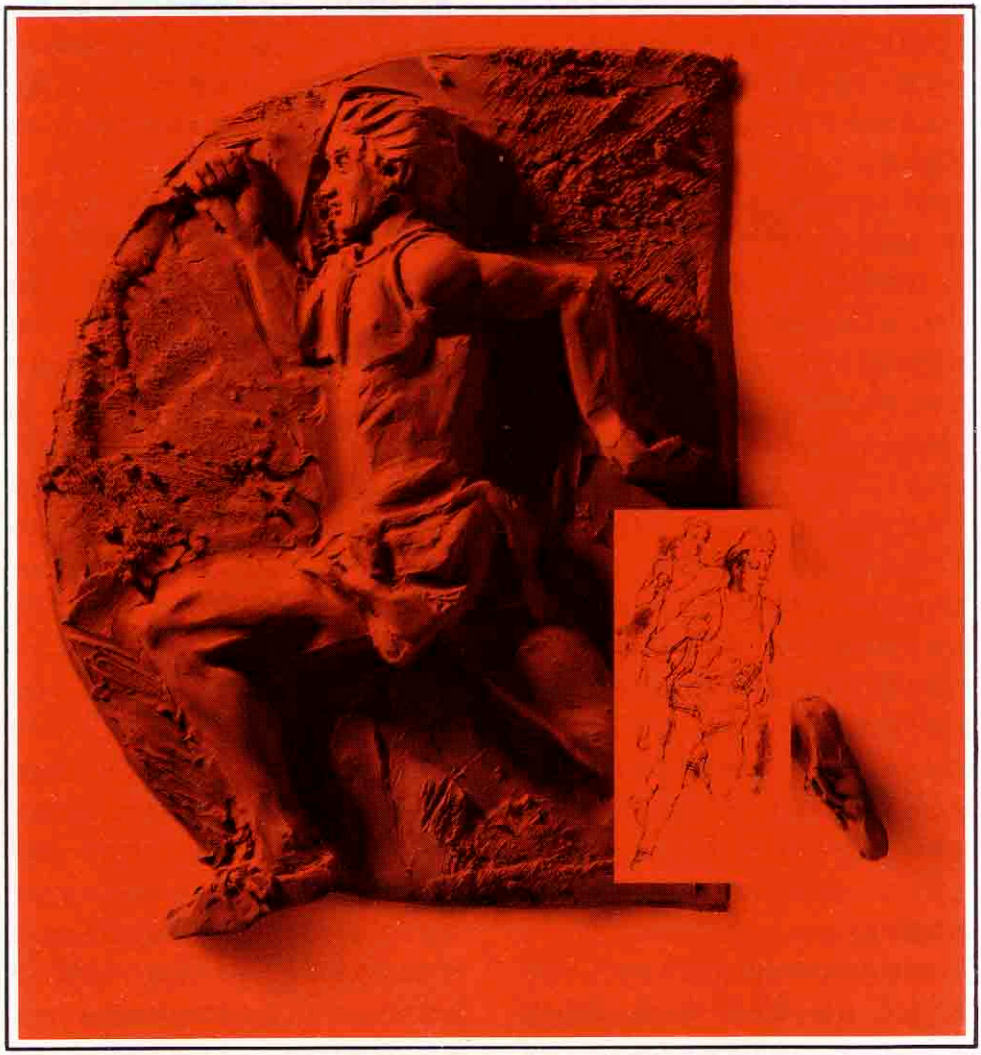
この試しの人生に，やさしい競走を与えられている人はひとりもいない。ヘブル人への手紙から，人生の競走について語っているパウロの言葉を読んでみよう。

「わたしたちの参加すべき競走を，耐え忍んで走りぬこうではないか。

『わたしの子よ，主の訓練を軽んじてはいけない。主に責められるとき，弱り果ててはならない。

主は愛する者を訓練し，受けいれるすべての子を，むち打たれるのである。』

強い者が戦いに勝つのでもない



あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを，子として取り扱っておられるのである。いったい，父に訓練されない子があるだろうか。」（ヘブル12：1，5—7）

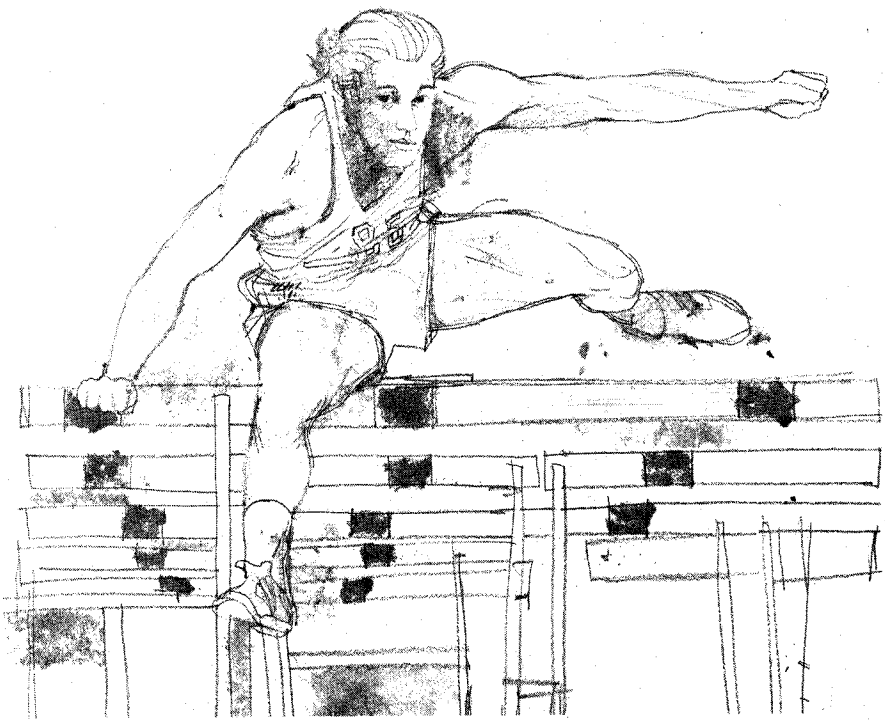
人生の競走を時として苦しく感じることがあるとしたら，多分それは私たちに対する主の意図されたことである。

あなたは今，自分が人生というマラソンコースのどこを走っているか知っているだろうか。然るべき所にいるだろうか。私がこのように言うのは，自分自身を見捨てようとしている人を知っているからである。この競走は確かに苦しい。そして，それをさらに困難なものにしているのが数々の障害物である。試験に失敗することやガールフレンドを失うこと，罪を犯すこと，このような障害に直面した時，彼らはこの競走を放棄しようとする。私が学生ワード部の監督をしていた時，私のもとにやって来て，こう言う学生がよくいた。「監督，もうだめです。悔い改めてもとのようになることはできません。もう，どうしようもありません。」このような人は次のような主のみ言葉を忘れているのである。「たといあなたがたの罪は緋のようであっても雪のように白くなるのだ。」（イザヤ1：18）悔い改めの道は閉ざされてはいない。新たな目標に向かって前進できるのである。私たちがあきらめない限り，またこの競走はきつすぎると判断を早まらない限り，新たなスタートラインに立つことができるのである。

人を裁かない

ほかの人には手を貸そうとしない人々がいる。彼は，自分の親あるいは兄弟，姉妹，友達，ルームメイトに手を貸す必要はないと考えている。あまりにも厳格で，自分の考えに固執し，振り返ることを知らず，ほかの人の競走はすでに終えていると考えているのである。しかしこのようなことがあってはならない。デビッド・O・マッケイ大管長は，いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない，と語っている。また，マービン・J・アシュトン長老は，私たちの失敗はあきらめて努力を止めた時にこそ訪れると述べている。従って，私はこう申し上げたい。人生の競走は私たちがこの世に存在する限りいつまでも続くものである，と。私たちは自分自身をも，他の人々をも見捨ててはならないのである。

この競走を続けながら，人の走り方をとやかく言う人がいる。けれども，他人のマラソンコースにどのような障害や困難が待ち受けているかを知ることのできる人はいない。私たちは，人はそれぞれに厳しい試練に直面するということを理解しなければならない。困難に耐える力は人によって違うものである。ある人にとって針で刺された程度の痛みであっても，他の人にとっては耐え難い程の痛みを感じさせるものがある。これと同じことが試練についても言える。ある人にとって大きな障害だと感じていることも，他の人にとっては単なるチャレンジにしか感じないことがある。全く目立たず，あまりボーイフレンドに恵まれなかった若い女性にとって，ひとりのボーイフレンドを失うことはどれほど大きな苦痛であろうか。一方，多くの男性から愛された女性は，そのような愛を味わわなかった女性の悩みや苦しみを理解するどころか，気づくことさえないであろう。私たちが深い思いやりの心を持てるように，私は祈っている。また，他の人がどのような道を歩んでいるか



を心から理解し，軽率で思いやりのない裁きを下さないようにと願っている。

疲れ切っている人に手を貸す

人生のこの競走において，すべてが順調にいっているという人がいる。素晴らしいことである。人生はバラ色である。このような状態にある時，感謝することを学んでいただきたい。また，謙遜になり，主が与えてくださったこの安らぎを感謝するようにしていただきたい。うぬぼれることのないように，また独善的になったり，自己満足に浸り切ったりすることのないように。このような時こそ，自分の持てるものを見いだし，人に手を差し伸べ，力を貸すようにすべきである。この競走で主が私たちにお与え下さっている素晴らしい恵みのひとつは，このマラソンコースをただ独りで走らなければならないという規定がないことである。他の人々と一緒に走る方がよい。他の人々が援助の手を差し伸べ，十字架を運んでくれ，私たちを励まし，力を与えてくれるからである。また，あなたが順調

に走り続けている限り，あなたの力を他の人人に与えることもできるのである。

ある日の出来事についてお話したいと思う。私が事務所に入ろうとすると，隣の事務所（彼はあるワード部の監督をしている）の入口の前でひとりの女性が心を取り乱した面持ちで立っていた。その女性はドアをノックしながら，しばらく監督を待っていた。しかし彼は外出中であった。彼女の表情がどうにも気がかりだったので，私は声をかけた。「失礼ですが，どうかなさいましたか。私に何かお役に立てることはありませんでしょうか。」

彼女は答えた。「____兄弟を待っているんです。私の監督なんです。でも，留守のようです。」

「私で何かお役に立てますか。」そう言って彼女を私の事務所に通した。話しているうちに，この女性が38人いる私のいとこのひとりであることがわかった。私たちが身内同士だと知るや，彼女はこれまでの悲しい日々の出来事を話し始めた。彼女は独身で，将来の望みを全く待っておらず，人生に失望していた。その後彼女は監督の助けを得るようになったが，私は身内の者として何ヵ月間かできる限り彼女と親しく語り，助け，相談にのった。その結果，彼女は家族のもとに帰り，病弱な母親の世話をするのが一番よいと決心したのだった。家に帰った彼女は失望からいくらか立ち直り，霊的な事柄に再び打ち込むようになった。そうしたある日，私に電話がかかってきた。彼女が，妻と死別した5人の子持ちの男性と知り合いになったという話だった。しばらくして私は，彼女と神殿の中で会った。彼女は伴侶と結び固められ，一度に5人の母親となったのである。私はいつでも人々のお役に立ちたいと願っている。また，あなたが人生の競走で疲れ切っている人々に助けを与えることができるようにと，私は祈っている。

もう一度，使徒パウロの言葉を引用したいと思う。パウロは「肉体に一つのとげ」（IIコリント12：7）を受けながらも，ダマスコへ向かう途中に受けた示現を守り通し，数々の迫害に耐えて生涯を過ごした。パウロはそのことについて，テモテの民に書いている。そのことはあなた方も御在知のことと思う。

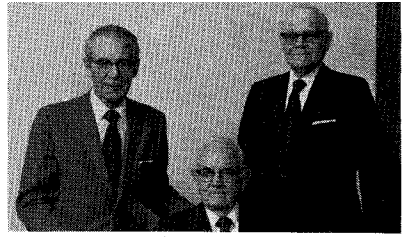
「わたしは，すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。

わたしは戦いをりっぱに戦いぬき，走るべき行程を走りつくし，信仰を守りとおした。

今や，義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には，公平な審判者である主が，それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく，主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。」（IIテモテ4：6—8）

人生の競走を力強く，雄々しく走り通そうではないか。また，人々に援助の手を差し伸べようではないか。この世の生涯の人々のことをよく考えようではないか。この世の生涯を完走し，天の王国における報いを得ることができるよう，天父に導きと助けを求めて祈ろうではないか。

☆　　☆



キンボール大管長から受けた祝福

ノーマン・ビンセント・ピール

苦しい時には，祈り，善をなし，愛を示し，神の存在を身近に感じるようにすることです。これは私が体験を通して学んだことです。

私はある時大きな問題を抱え，それを解決しようと2，3週間一生懸命に努力しました。その問題は今考えてみれば大したことではなく，悩む必要はなかったのですが，当時の私にとっては一大事であり，重大な問題でした。そして，私は先に述べた方法すべてを使って，無事にその問題を解決することができたのです。

先日，ユタ州のソルトレーク・シティーに演説に行った時，末日聖徒イエス・キリスト教会の本部に招かれ，大管長とふたりの副管長にお会いしました。この団体は世界に350万の会員を擁する立派な宗教組織で，世界各地で人々に多大な貢献をしています。彼らは神のみ業を行なっており，幸せで，徳高く，正直で，義しい人々を生み出しています。「あなたがたはその実によって彼らを見わける」（マタイ7：20）という言葉の通りです。

私は先代のふたりの大管長には面識がありましたが，現在の大管長にお会いするのはその時が初めてでした。末日聖徒イエス・キリスト教会の今日の大管長はスペンサー・W・キンボールという方で，彼は幾度となく肉体的な苦難に直面し，それを克服してきました。私はこれら3人の神の人とお会いしたのです。私たちは楽しく語り合いました。私は最後に，大管長にこう申し上げました。「キンボール大管長，私を祝福していただけませんでしょうか。」このようなお願いをしたのも，キンボール大管長の中に言いようのない霊的なものを感じたからです。

キンボール大管長は私にこう問い返されました。「私どもの教会員が行なっている方法で祝福してもらいたいとおしゃるのですか。」

私は，「はい，そうです」と答えました。

すると，キンボール大管長は私の背後に立ち，ふたりの副管長と共に私の頭の上に手を按いて，静かに，しかし威厳のある声で優しく私の名前を呼んで私のために祈って下さいました。主が私と共にあるよう，私を愛し，私を見守り，導いて下さるようにと祈って下さったのです。キンボール大管長が祈り始めるや私の心は和らぎ，急に何とも説明し難い喜びに満たされ，私は思わずこう言ってしまいました。「大管長，主がここにいらっしゃいます。私にはそう感じられます。」

私は大管長に別れのあいさつを述べると，外に出ました。歩きながら，急に肩の荷が軽くなったように感じました。長い間の苦しみの答えが得られたのです。私は勝利を得た思いでした。私が主を求めたので，主が私に答えて下さったのです。主に祈り求めたので，主は「われここにあり」と答えて下さったのです。

（ノーマン・ビンセント・ピール　米国の宗教家。ニューヨーク州ニューヨーク・シティーのマーブル協同教会の牧師。本文は1975年4月27日にラジオ放送されたピール牧師の説教より引用。許可を得て掲載。）

聖徒の道　1978年4月20日（毎月1回20日発行）　第22巻第4号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に，願い求めるがよい。そうすれば，与えられるであろう。

（ヤコブの手紙　第1章5節）

末日聖徒イエスキリスト教会